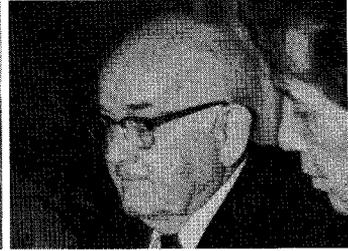
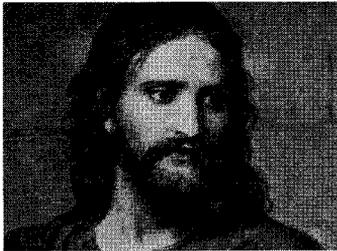


# 聖徒の道 11 1984





本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です

## 末日聖徒イエス・キリスト教会

### 大管長会

スペンサー・W・キンボール  
マリオン・G・ロムニー  
ゴードン・B・ヒンクレー

### 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
ハワード・W・ハンター  
トマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト  
ニール・A・マックスウェル  
ラッセル・M・ネルソン  
ダリン・H・オークス

### 顧問

M・ラッセル・バラード  
ローレン・C・ダン  
レックス・D・ピネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー

### 編集長

M・ラッセル・バラード

### 国際機関誌

編集主幹：  
ラリー・A・ヒラー  
編集副主幹：  
デビッド・ミッチェル  
子供の頁編集：  
ボニー・ソーンダーズ  
レイアウト・デザイン：  
マイケル・カワサキ

## もくじ

日の光栄に至る自立の本質……………	マリオン・G・ロムニー……………	1
導くのは私、運転するのはあなた……………	J・ステイブン・ラーセン……………	8
モルモン経についての証……………		10
みたまの力を毎日の聖典勉強から……………	ブルース・T・ハーバー……………	17
感謝祭に祈るんだけど……………	ジョン・スワンソン……………	21
質疑応答/証……………	ジョージ・D・ダラント……………	22
ホームティーチング……………	H・ケント・ラップリー……………	27
養蜂家……………	スコット・サミュエルソン……………	29
任命……………	フレッド・A・ロウ……………	33
水とパンに……………	レアード・ロバーツ……………	40
えいゆうラスペンサー・W・キンボール……………	ビビアン・ポールセン……………	42
アクマとキバ……………	リン・ゲスナー……………	46
おもちゃばこ……………		52
チャーチニュース/ローカルページ……………		54

表紙：「自立」の一面を描いたジュディス・メア画「家庭菜園」

1984年11月号 聖徒の道 第28巻第11号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 明文社

定 価 年間予約/海外子約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

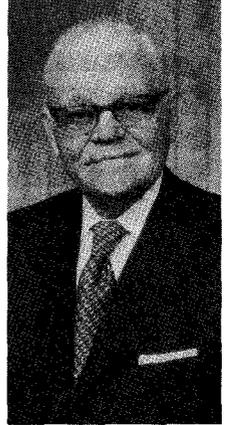
1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA0518JA Printed in Tokyo, Japan.

©1984 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急に渋谷ブックセンターにご連絡下さい。●「聖徒の道」のご注文・お支払いなどの連絡先……〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理課 渋谷ブックセンター/☎03-464-1617(代)

# 日の光榮に至る 自立の本質



このメッセージは、1982年10月の総大会 第一副管長  
でなされたロムニー第一副管長の説教を、マリオン・G・ロムニー  
要請により再び掲載したものです。

**私**は福祉の原則に含まれる聖い予言者  
たちが教えてきた簡潔な真理を大切に  
しています。私はこの真理について話す  
ことに飽きることを知りません。きょうは  
皆さんに、自立の原則と、それが霊的成長  
に及ぼす影響についてお話したいと思いま  
す。

時の初めから、人は自活し、それによっ  
て自立するように勧告されてきました。主  
がこの原則をそれほど重要視されるのはな  
げでしょうか。その理由を知るには、自立  
の原則と人の自由とがいかに密接につな  
がっているかを理解しなければなりません。

このテーマに関して、アルバート・E・  
ボウエン長老はこう語っています。「主はご  
自身の民に、それが外的な要因によるもの  
であれ、精神的な束縛から生ずるものであ  
れ、抑圧された状態を抜け出すように望ん  
でおられるに違いありません。……ですか  
ら教会は、働く力のある人をいつまでもほ

かに依存した状態に置いたままにする制度  
をよしとはしません。与えることの真の目  
的は、それとは逆に、人々が自立できる地  
点まで到達し、束縛を免れるように助ける  
ことであると、教会は主張しているのだ  
す。」(「教会福祉計画」1946,p.77)

現在、社会の中では善意ある人々の手  
によって困窮した人々を援助する数多くのプ  
ログラムが実施されています。しかし、こ  
うしたプログラムの多くが、人々の自立を  
助けるのとは対照的に、単に援助を与える  
だけの先の見通しを欠いた目標を掲げてい  
ます。私たちは、働く力のある人々の自立  
を目指して努力を続けていかなければなり  
ません。

私は以前にリーダーズ・ダイジェスト誌  
から次の記事を切り取っておきました。

「私たちにもなじみの深い隣町セント・  
オーガスティンでは、かもめの群れが豊か  
な食物を前に、飢え死にしている。魚は豊

富にいたるが、かもめたちは魚を取る方法を知らないのである。彼らはすでに何世代の間、エビ漁船が引き揚げた網から投げしてくれるくずエビをあてにして生きていた。ところが、その漁船団がほかの漁場へと移ってしまったのである。……

エビ漁船はかもめたちに生息しやすい格好の場所を提供していた。かもめたちはわざわざ自分で魚の取り方を学ぼうとはしなかったし、子供たちに魚を取ることを教えるようもしなかった。代わりに、エビのつまった網のところへ子供たちを連れていったのである。

思いのままに大空を飛び、時には自由の象徴そのものとも言われるあのかもめが、『勞せずして得る』という誘惑に負けたために、今や飢えて死のうとしてゐる。自立が施し物の犠牲になったのである。

このかもめに似た人間が大勢いる。彼らは何ら悪びれることなく、合衆国政府という『エビ漁船』が引き揚げる税金の網からおいしい食物をついばんでいる。しかし、政府の支給品が底をついたらどうなるだろうか。次の世代を担う子供たちはどうなるのだろうか。

愚かなかもめにならないようにしようではないか。私たちは……自給自足する能力や、必要な物を作り出す技能、儉約の精神、それに真に自立を愛する心を持ち続けなければならない。』（『愚かなかもめの物語』「リーダーズ・ダイジェスト」1950年10月号〔英文〕、p.32）

むさぼることや不当な利益を得ることが習慣となって広く現代社会をむしばんでいます。そのために、財産をさらに増やす力を持っている裕福な人までが、政府に対して利益の保証を求める有り様です。選挙に

なれば、立候補者は政府の予算を有権者のためにどう使うかを公約し、それによって当選が決定することがしばしばあります。こうした風潮が世間一般に受け入れられ、実際に行なわれるようになれば、いかなる社会であれ、そこに住む人々は奴隷と化してしまうでしょう。

私たちは政府の庇護を受けるだけの者となるわけにはいきません。たとえそうする合法的権利があってもです。そこには自尊心を初め、政治的、物質的、靈的な自立を失うというあまりにも大きな犠牲が伴うからです。

一部の国々では、勤勞所得と不勞所得を区別するのが非常にむずかしい状況にあります。しかし、原則はいずれの国においても同じです。すなわち、自立を目指して努力し、自分の生活をほかの人々に依存してはならないということです。

過ちを犯しているのは政府だけではありません。多くの両親たちは、家族の蓄えから与えるばかりで子供たちを甘やかし、「愚かなかもめ」を仕立てていないでしょうか。子供に物をあてがうだけの両親は、国民に失業手当を施すだけの政府と同じ過ちを犯しています。事実、そのような両親の態度は、政府の対策以上に深刻な害を及ぼす可能性があります。

監督や神権指導者が、ワード部の会員を「愚かなかもめ」に仕立てる過ちを犯していることもあります。一部の教会員は、経済的、情緒的に監督に依存するようになっています。その出所がどこであろうと、施しは、施しです。教会や家族のとる行動はすべて、会員や子供たちを自立へと導くものでなければなりません。政府の計画は必ずしも私たちの思い通りになるわけではあ

りません。しかし自分の家庭や自分たちの集まりであれば、私たちが管理できます。もし、これらの原則を教えて実践するならば、いかなる国にあらうと政府の対策に潜む好ましくない影響に立ち向かっていくことができるでしょう。

私たちの中には、どんなに自立したくてもそれができない人もいます。ヘンリー・D・モイル副管長は、こうした人々のことを心に描きながら、次のように語りました。

「この偉大な原則は助けの必要な人々や貧しい人々に援助の手を差しのべることを拒むものではありません。体を動かすこと

のできない人、老人、病人は配慮の行き届いた世話を受けますが、働く能力のある人は、みずからの努力によって道を開くことができるのであれば、最善を尽くして働き、ほかの人に依存せずに自立します。すなわち、逆境を一時的なものとしてとらえ、自己の能力に対する信頼をもって正直に働くのです。

確固たる信仰と真の勇気を持ち、不動の決意を抱き、胸の内に自立への愛を燃え立たせ、みずからの業績に誇りを抱いて歩むならば、乗り越えられない障害に出会うことなどめったにありません。」「(大会報告)



1948年4月, p. 5)

ここで特に重要な真実についてお話したいと思います。自立は最終目的ではなく、それに至るための手段です。したがって、完全に自立している人が、そのほかの望ましい特質をことごとく欠いている場合もあります。富を得れば他人の援助をまったく必要としなくなり、自立することもできます。しかし、そこに何らかの霊的な目標がなければ、その人の身と霊をむしばむことになりかねません。

教会の福祉プログラムは霊的なものです。1936年、このプログラムが始められたとき、デビッド・O・マッケイ大管長は、次のような洞察力に満ちた所見を述べました。

「私たちは、霊的な特質の育成に最大の関心を寄せなければなりません。霊性とは人が身につけることのできる最高のものであり、『人間を万物の霊長と呼ぶための至高の賜』すなわち人間に備わっている神性のことなのです。それはまた、己れに打ち勝ち、無限無窮の御方と心を通わすことのできる意識でもあります。ただ霊性だけが、人生で最高の満足をもたらすことができるのです。

衣服の乏しい人々に衣服を与え、食卓の貧しい人々に十分な食糧を与え、職がなく絶望と戦っている人々に仕事を与えること、これらは確かに意味のあることです。しかし、結局、教会〔福祉計画〕からもたらされる最大の祝福は、霊的なものなのです。外見的には、すべての行為が物質的な事柄に向けられているように思えるかもしれませんが。衣服の再生、果実や野菜の缶詰、食料品の貯蔵、入植のための肥沃な土地の選定、これらはみな、この世的な事柄に見えます。しかし、そこに浸透しているものは、

そしてそれらの行為を促し聖別しているものは、まさに霊性なのです。」(「大会報告」1936年10月, p.103)

教義と聖約29章34-35節から、すべての戒めは霊にかかわるもので、この世的な戒めというものは存在しないことがわかります。また、人間は「自ら自由意志を行う」者でなければならないこともわかります。しかし、人間は自立しなければ、みずから自由意志を行なうことはできません。このことから考えてみると、独立や自立は私たちの霊的成長を左右する重要な鍵であることが理解できます。自立を脅かされるような状況に陥った人は、自由が脅かされていることに気づくでしょう。すなわち、ほかへの依存度が高まれば、行動する自由がたちまち失われていくことに気づくのです。

今までお話ししてきたことからおわりの

教会や家族のとり行動はすべて、  
会員や子供たちを自立へと導く  
ものでなければなりません。



ように、自立は行動する完全な自由を得るための前提条件です。しかも、その自由を使って正しい選択をしなければ、自立の中に霊的なものは存在しません。それでは、霊的な成長を遂げるには、自立した後に何をすればよいのでしょうか。

自立を霊的なものとするための鍵は、自立に伴う自由を用いて神の戒めを守ることです。聖典の中で明らかに命じられているように、貧しい人々に与えることは、豊かに持つ人々の義務です。

ヤコブはニーフアイの人々に向かって次のように言いました。

「あなたたちは自分の兄弟を自分自身のように思え。かれらと皆親密にして、あなたたちのようにかれらも富者になるように惜まらずにあなたたちの財産を与えよ。

財産を求める前にまず神の王国を求めよ。

あなたたちがすでにキリストに望みをもってから宝を求めたならばその通りに宝が手に入るであろう。しかし、その時あなたたちがその宝を求める目的は、裸でいる者に着物を着せ、飢えている者に食を与え、束縛されている者を救って自由にし、病んでいる者と悩んでいる者とを救うなど、およそ善事を行うことである。」(ヤコブ2：17-19)

主は今日の神権時代において、教会が発足してわずか10カ月足らずのときに次のように言われました。

「汝らもしわれを愛すれば、われに仕えわがすべての誠命を守るべきなり。

見よ、汝ら貧しき者のことを思い起し、……己が財物を神に奉獻せよ。」(教義と聖約42：29-30)

その同じ月に、主は再びこの問題に言及されました。教会員が、多少怠慢であった

ことは明らかです。彼らは即座に行動に移していませんでした。

「見よわれ汝らに告ぐ。汝ら貧しき者、乏しき者を訪れて救いを施さざるべからず。」(教義と聖約44：6)

私には何か理屈に合わないよう思えるのですが、私たちは自分のためになるこれらのことを行なうのに、絶えず主から戒めていただかなければなりません。主はこう言われました。

「自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。」(マタイ10：39)

私たちは人に仕え、人を助けることによって「自分の命を失」います。しかし、そうするとき、永遠に尽きることのない真の喜びを味わうのです。奉仕とは、日の光栄の王国に入る資格を勝ち得るためにはありません。それは、日の光栄の王国に昇栄する人の生活を形造る大切な要素なのです。

ああ、私たちの心が清められて、これらすべてのことが自然に行なわれるようになるとき、それは何と輝かしい日になることでしょう。その日には戒めなど必要ありません。なぜなら、だれもが経験を通して、真の幸福は無私の奉仕に携わるときにもたらされることを知っているからです。

奉仕に必要な条件について考えてみると、あるいは神がまさに奉仕のお方であることについて考えてみると、自立することがいかに重要であるかわかりになると思います。自立していなければ、私たちが持つて生まれた奉仕への願いを実行することはできません。何も持っていなければ、どうして与えることができるでしょうか。食糧棚

が空では飢えた人に食物を施すことはできません。財布が空ではお金に困っている人を援助することはできません。心が飢え乾いていては、人を理解し支えることはできません。学んでいなければ、教えることはできません。そして何よりも大切なことは、霊的に弱くては、霊的な導きを与えることはできないということです。

豊かな人と貧しい人との間には、相互依存の関係があります。施しという過程を通して、貧しい人は強められ、豊かな人は謙虚になります。そして、両者が共に清められるのです。貧しい人は貧困という束縛から解放されて、物心両面にわたり、自分の持つあらゆる可能性を自由に伸ばすことができます。また豊かな人は、必要以上のものを分け与えることにより、施しという永遠の原則を実践するのです。完全に立ち直って自立した人は、助けを必要とする人人に手を差し伸べます。こうして奉仕の輪は広がっていくのです。

だれにでも自立している部分と人に頼っている部分とがあります。したがって私たちは、各々が力を発揮できる分野において、人を助けるために尽力しなければならないのです。同時に、本当に助けが必要なときには、妙なプライドは捨てて、援助の手をありがたく受け入れなければなりません。もしそれを拒むならば、助けを与えようとしている人から、清められる機会を奪うこととなります。

教会の使命に関する話の中で最近強調されている3つの使命のひとつは、聖徒たちを整えることです。これこそ福祉プログラムの目的です。これは終わりの日のプログラムではなく、今日の私たちのためのプログラムです。なぜなら今が私たちの生活を

整えるときだからです。これらの真理を常に心に留めておくことができますように祈ります。

## 話し合いのための提案

ロムニー長老の説教を読み、以下の原則について家族で話し合ってみましょう。

自立と奉仕を通して生活を完全なものとする原則

自立を妨げるもの

- 怠惰
- 浪費

- 戒めを破ること

- 家庭貯蔵に関心を示さない

- 食糧生産を行わない

- 負債

- 職業上の技術に対して無関心である

- 否定的な態度

奉仕を妨げるもの

- 自分と家族のことだけしか考えない

自立を促すもの

- 勤勉と労働
- 儉約、貯金、予算組み

- 知恵の言葉に従う、戒めを守り、自分の一を正しく納める

- 食糧、衣服、(可能ならば)燃料を1年分貯蔵する

- 食糧生産を行なう

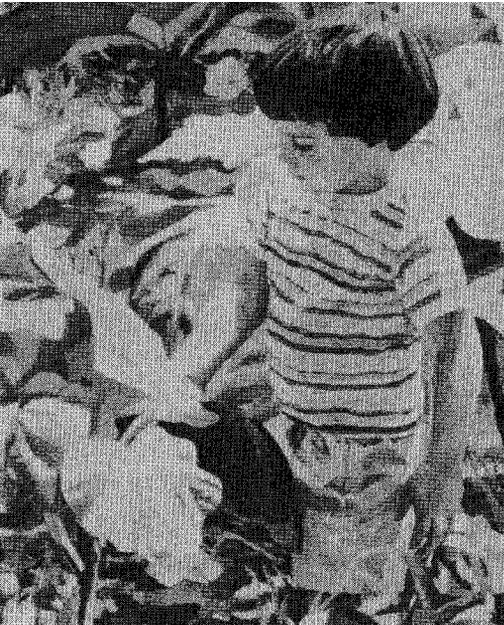
- (できる限り)負債を避け、経済的に安定するよう心がける

- 職業上の技術を上させる

- 肉体的、情緒的、社会的に健康な状態に達する

奉仕を促すもの

- ほかの人々のことも考える



奉仕は、日の光栄の王国に昇栄する人の生活を形造る大切な要素なのです。

- 分かち合うことをいやがる
- 持っているものをできる限り分かち合う
- 財産に固執する
- 断食献金を惜しみなく納める
- 自立できる人の世話を焼きすぎ、依頼心を強くしてしまう
- 自立の精神をほかの人の心に植えつけ、自立できるよう助ける
- 自分自身と家族にのみ関心を払う
- 時間、才能、方法を家族、教会、社会に分かち与える
- 自分には奉仕するための時間や分かち合える才能がないと思っている
- 個人やグループによる奉仕活動に参加する

## ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点を話し合うとよいでしょう。

1. 私たちは自立できるよう努力しなければなりません。教会の教えやプログラムは、この最終的な目的を常に念頭に置いている。
2. デビッド・O・マッケイ大管長は次のように述べている。「教会〔福祉計画〕からもたらされる最大の祝福は、霊的なものなのです。外見的には、すべての行為が物質的な事柄に向けられているように思えるかもしれませんが、しかし、そこに浸透しているものは、そしてそれらの行為を促し聖別しているものは、まさに霊性なのです。」
3. 自立は行動する完全な自由を得るための前提条件である。自立を霊的なものとするための鍵は、人々に与え、奉仕の手を差しのべる自由を用いることである。
4. ほかの人々に奉仕することは、日の光栄の王国で栄えを受けた生活を送るための、大切な要素である。

### 話し合いを進めるために

1. 自立について自分の気持ちや経験を話す。家族にも話してもらう。
2. 家族で朗読したり話し合ったりすると良いと思われる聖句や引用文がこの記事の中にないだろうか。
3. 訪問の前に家長と打ち合わせの方が良い話し合いができるのではないだろうか。自立について、定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

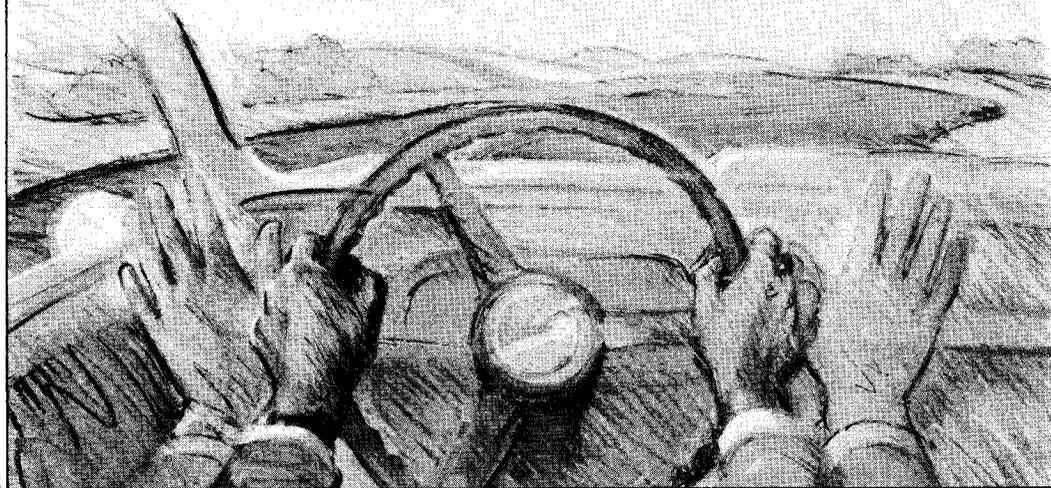
**若**い頃、私は主のみ業を十分に果たしてさえいれば、主が必ず自分を守ってくださるという考え方をしていました。どこでそのような根拠のない考えを持つようになったのか定かではありませんが、とにかく私はそのような考え方にひかれ、何年間も忠実にその考えに従ってきました。実際、用心しなければならぬときや注意しなければならぬときに、私はすばらしい守りを受けてきました。そして仕事のうえでちょっとした失敗をしたり、家庭での問題にぶつかったり、ときには大きな災難に出くわしても、私は寛大な気持ちで対処することができました。「きっと主が私を試しておられるんだ。」仕事上の思惑がはずれたときに私の口から出る言葉がこれでした。また、口論が家族をおびやかしているようなとき、「サタンが本当に私たちのうしろにいてあおり立てている。」私はそのように言っていました。

私は、主が常に自分を守ってくださ

ると思っていたので、神に願う前に「心の中によく思い計はか」（教義と聖約9：8）の必要はないと思っていました。手短かにちょっと祈るだけで十分だと思っていたのです。私はよくこう祈りました。「父よ、私は最善を尽くしてあなたのみ業を行ないました。どうぞ私のこの仕事に祝福をお与えください。」私は、教会での召しを完全に果たしていれば、神は私の家族をなおざりにされることは決してないと思っていました。つまり、神のことを第一にしていれば、財政的に困るようなことは何ひとつないと思っていたのです。そのように考えていた私は、救い主がサタンから受けたような誘惑にみずから屈していることに気づきませんでした。サタンはこう言ったのです。「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおみつびごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますか

## 導くのは私、運転するのはあなた

J・スティーブン・ラーセン



ら。」(マタイ4:6)

しかし、挫折感や失望の伴う「試し」が多くなってくるにつれ、私はとうとう自分の軽率さを反省しはじめたのです。私は聖典を読み、祈りの気持ちで問題に対する自分の責任をよく検討してみることにしました。その結果ははっきりわかったことは、神は私たちに、進むべき方向が正しいかどうか常に神に確認を求めながら、自分で計画し、行動するよう望んでおられるということでした。神との関係がいかに密接であっても、個人の努力にとって代われるものではありません。神からの導きはむしろ、私たちが自分で努力して昇っていかねばならない成長や理解といった段階を、共にについて案内してくれるガイドと言った方がいいかもしれません。こうして新しい考え方をするようになってから、私は自分の問題をよく整理し、自分の生き方に責任を持つようになったのです。

ある日、私たち家族は家庭の夕べの活動として近くの人にドライブに行きました。急カーブを運転しながら、私は家族に、先週一週間私が熱心に主に仕えたと思うかどうか尋ねました。みんなの答えは、監督として、私が主のために十分に時間を使ったということでした。そこで私はこのように質問してみました。「もしお父さんが、第一に神の国と神の義とを求めたら、すべてのものは添えて与えられ、神様は私たちを守ってくださるだろうか。どうだい。」(マタイ6:33参照)最初は迷っていたようでしたが、すぐに全員の意見が一致し、聖典に約束されている通りになるという返事でした。「そうか、それじゃ……」私は陽気に、自信を持って言いました。「きょうは一日中忙しかったし、疲れていてあまり注意深い運転ができそうもない。あとはハンドルの向くままに任せて、神に目的地まで連

れていってもらうことにしよう。」車の中はたちまち騒ぎになりました。5人の子供のうち4人は、神にハンドルを預けることに十分な信仰が持てないで当惑していました。2歳の子供の信仰だけは揺らぐことなく、だれが運転しようとかまわないといった様子でした。そこへ助け船を出した賢明な妻は、私の方を向くとこのように言いました。「神様が私たちを目的地まで連れていてくださることは信じているわ。でもその必要はないわ。あなたが運転席に座っているんですけど。しっかりハンドルを握って、気をつけて運転してくださいね。」

「わかった。」私はそう答えると続けて言いました。「神に仕えることと神の王国を築くことは、人生の中で最も喜びの多い仕事なんだよ。祝福もあるしね。でもそうした仕事をしているからといって、日常生活で出くわすいろいろな問題に良識を働かせたり、用心する必要がないということではないんだ。実際、そうした問題にも助けは受けられるがね。きょうのレッスンはこれで終わり。」

それ以来、私たちの生活や状況が改善され、神に対する理解も深まりました。そしてなぜ神は私に失敗させるのかということに、いちいち聖句をもって弁解し、揺らぐ信仰を支える必要もなくなりました。代わりに、私は神が私たちに聖典や近代の予言者、聖霊の賜を与えてくださり、理解力を高めてくださっていることに感謝しています。私たちの愛する御父は私たちを導いてはくださいますが、私たちに代わって運転はして下さらないのです。神は私たちにただ運転するのではなく、それ以上のこと、すなわち神ご自身のような運転をし、神のおられる所に、私たちもいることができるようにと望んでおられるのです。(ヨハネ14:3参照)

# モルモン経 についての 証

救い主や予言者たちは、  
「最も正確な書物」について  
次のように証しています。

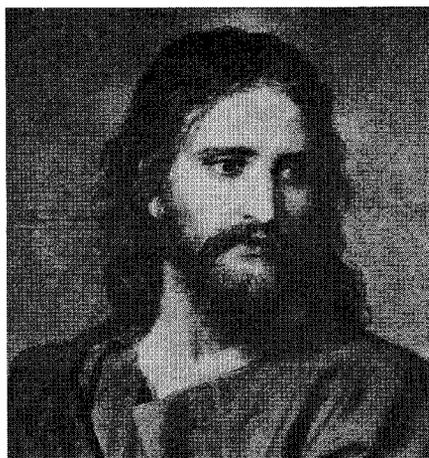
## 主イエス・キリスト

「彼（ジョセフ・スミス）はその書を、  
正にわが命じたる部分を翻訳したり、而して  
この事は汝の主、汝の神生きたもうが如  
く真実なり。」（教義と聖約17：6）

「（神は）前より備えたりし方法により、  
モルモン経を翻訳するために天より能力を  
彼に与えたり。

この書の中には、墮落したる或る民の記  
録と、異邦人並びにユダヤ人に与うるイエ  
ス・キリストの完全なる福音とを載せたり。

またこの書は靈感によりて与えられ、天  
の使たちの導きと恵みによりて他の人々に  
対して確認され、この人々によりて世に宣  
べ伝えられ、



主イエス・キリスト

聖典の真実なることと、神は人々に真に  
靈感を与えて古えの代と同じくまた今の代  
にも神の聖き業に人々を召すことを世に証  
す。

これを以て、また神は昨日も今日も世々  
限りなく同じ神にてあることを示すなり。

されば、信仰をしてこれを受け入れ義し  
き行為をなす人々は永遠の生命の栄冠を受  
くべし。」（教義と聖約20：8-12, 14）

「また当教会の長老、祭司および教師た  
ちは、聖書と完全なる福音を載せたるモル  
モン経とに誌されたるわが福音の原則を教  
うべし。」（教義と聖約42：12）

## ジョセフ・スミス

「私は、兄弟たちにこう語った。『モルモ  
ン経はこの地上で最も正確な書物であり、  
私たちの宗教のかなめ石であって、人がそ  
の教えに従って最も神に近づくことのでき  
る書物である。』」（「教会歴史」4：461）

「私はこの記録を神の賜と力によって翻  
訳した。」（「教会歴史」4：537）



ジョセフ・スミス

「私たちはモルモン経を受け入れようではないか。モルモン経は、やがて末日に世に出るようにと、ひとりの男が自分の近くの野原に持っていき、そこに隠し、信仰により守り通してきたものである。種の中でも最も小さな種であるモルモン経が、地表に現われて生長し、やがて枝を張り、堂々とした神々しいまでに壮麗にそびえ立つ姿を、またからし種のように、あらゆる草木の中で最も立派なものとなるのを目にしようではないか。モルモン経は真実である。生長し、地表に出てきた今、天からは義の見守りを受け、その枝には神が送られたみ力、賜、天使が宿っている。」（「教会歴史」2：268）

### ブリガム・ヤング

「私がモルモン経を手にしたのは、初版ができて2、3週間目のことであった。……私は2年間にわたってモルモン経を熟読し、検討した結果、ついにその書物を信じ、受け入れることになった。私には、実際に自



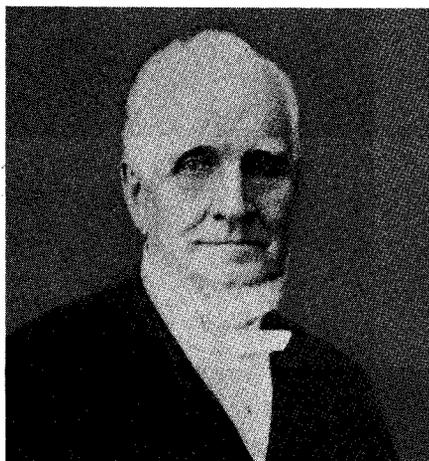
ブリガム・ヤング

分の目で見ているように、自分の指でさわっているように、またほかのどの感覚でも感じとれるように、その書物が真実であることがわかった。このようなことがなかったなら、私は決して今日までその書物を受け入れ、信じてくることはできなかったであろう。」（「説教集」3：91）

「主は何世紀にもわたり、その書物が地中よりいでて世に表わされること、そして人々にご自身がお生きておられ、末日に地の四すみより選民を集めることを知らせるために、道を備えてこられたのである。」（「ブリガム・ヤング説教集」ジョン・A・ウイツォー編、p.109）

### ジョン・テイラー

「モルモン経の福音と聖書の福音は一致している。どちらにも同じ教義が書かれている。違っているところと言えば、一方にはアジア人の歴史が、もう一方にはアメリカ人の歴史が載っているという点だけである。……私たちはこの書物が真実であると



ジョン・テイラー

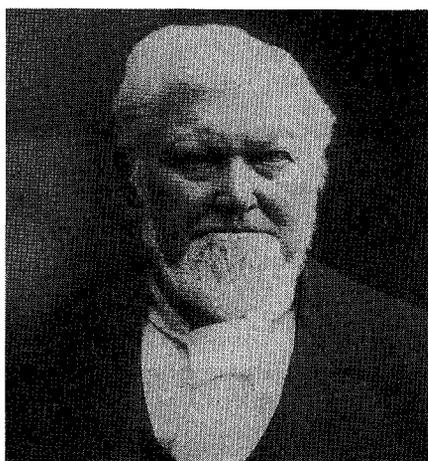
確信している。」(「説教集」5:240-41)

「自分を過信せず、良書(聖書やモルモン経)を調べなさい。そしてできるだけ多くの知識を得、墮落しないようしっかり神について、いかなる汚れにも染まらないようにしなさい。そうすれば、いと高き者の恵みが共にあるであろう。」(「説教集」12:398)

### ウイルフォード・ウッドラフ

「私がモルモン経を読み始めると、みたまはその記録が真実であると私に証してくれました。私はよく目を見開いて見、耳を傾け、心を開いて理解に努めた。また喜んで神の僕たちを家に招き入れた。」(マサイアス・F・カウリー「ウイルフォード・ウッドラフ:生涯と努力の歴史」)

「私は、モルモン経を証する神のみたまを強く感じた。私はモルモン経が暗やみからもれいずる光、地中から湧き出る真理であると確信した。」(ウイルフォード・ウッドラフの日記より。1833年12月31日 教会



ウイルフォード・ウッドラフ

資料保管所蔵書)

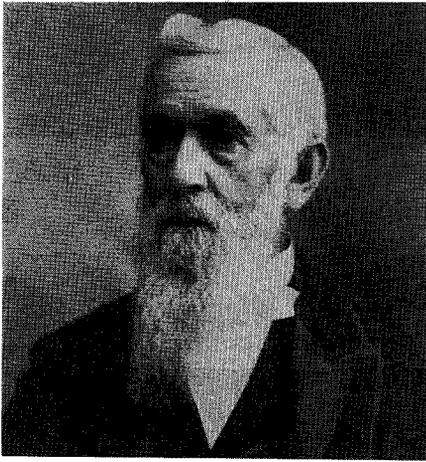
「私は聖書、モルモン経、教義と聖約を読んできた。私はそれらが永遠の真理であると思っている。……そこには今の世の人人に対する永遠の生命の約束が載っている。」(「説教集」22:146, 335)

### ロレンゾ・スノー

「私は、主からこのみ業(モルモン経を含む回復の業)に関する最も確かな啓示を受けた者のひとりである。啓示された事柄は何時間にもわたって私の心に強烈な印象を与えた。この完璧な知識は、生涯記憶の続く限り、私の心に残るであろう。」(「大会報告」1900年10月)

### ジョセフ・F・スミス

「モルモン経が……論破されることはない。なぜなら、モルモン経は真実だからである。この書物に書かれている教義や戒め、教えの中で、行間にもられた意味において、また真理という点で、聖書の中のキリスト



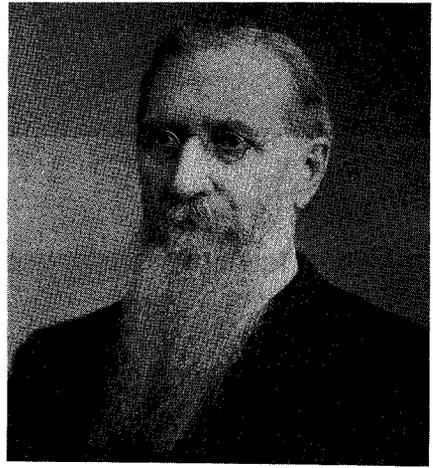
ロレンノ・スノー

や使徒の教えに一致しないものは何ひとつない。またこの書物には、耳を傾けさえすれば悪人を善人に、善人をさらに立派な人に成長させてくれる勧告や戒めが載っている。この書物には、始めから終わりまで靈感があふれており、すべての正直な心の持ち主に確信を与えてくれる。」「(『説教集』25:99-100)

「モルモン経や教義と聖約を読むことについて言えば……これらの書物に精通していなければ、だれもこの教会の有能な宣教師になることはできません。これらの書物に親しめば親しむほど、宣教師としての責任をよく果たすことができるようになります。」「(ジョセフ・F・スミスから息子ジョセフ・フィールディング・スミスにあてた手紙「予言者から息子へ：宣教師の息子たちに対するジョセフ・F・スミスの忠告」より)

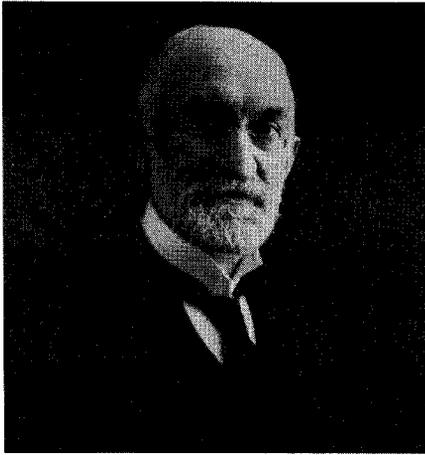
### ヒーバー・J・グラント

「私は、ここ6、7週間、信仰を持って



ジョセフ・F・スミス

注意深く、1日10ページの割でモルモン経を読破し、喜びに浸っている。この書物をこれほど楽しく読めたことはかつてなかったように思う。その中に記されている救い主の神聖な使命に関するすばらしい証は、ここ数週間かつてないほど私の心に強い印象を与えている。私はこれまでたびたび、若い頃モルモン経を読んだことやその書物が真実であること、またそれが、主張通りアメリカンインディアンの先祖の神聖な歴史であるという確かな証をどのようにして得てきたかについて話してきた。確かに少年時代には、救い主の神聖な使命に関するすばらしい教えや、この書物に記されているアメリカ大陸の人々への救い主の教え、アルマ、アビナダイそのほか多くの人々のすばらしい靈感に満ちた教えなどを十分に理解することはできなかったと思う。しかし、私は少年時代にこの書物を読むことができたことに、またこの書物の真実性に確信が得られたことに、そしてニーファイという人物に深い感銘を受けたことに言いよ

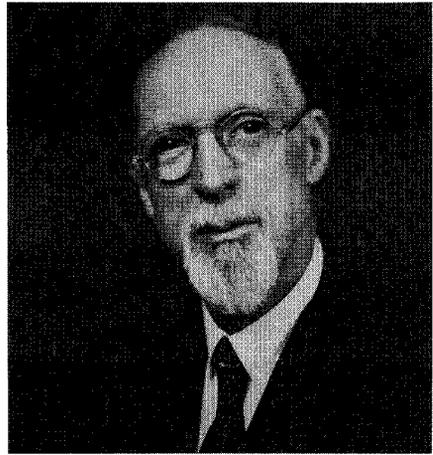


ヒーバー・J・グラント

うのないほど感謝している。……こうして再び読み終えて、心の中にモルモン経の神聖さに関するさらに大きな証が得られたことを喜ばしく思う。」(「大会報告」1924年4月、pp.157-59)

### ジョージ・アルバート・スミス

「モルモン経は、ほかのどの書物にも見られない内容を持った神聖な記録である。主は私たちに、主のすべての子供たちと永遠の福音の真理を分かち合うよう命じられた。その真理は、主が彼らを日の栄の王国に備えさせるためにお与えになったものである。……モルモン経を祈りを通して読み、それが神の言葉であるかどうかを知りたいと望むすべての人に、ジョセフ・スミスやほかの人間ではなく、私たちの天の父なる神が、それが神の言葉であることを確かに知ることができると約束したもうていることを思うにつけ、私の心は喜びに満たされる。……これらふたつの書物(モルモン経と聖書)は、私たちがどこから来て、なぜ



ジョージ・アルバート・スミス

ここにいいのか、そしてどこへ行くのかといったことを共に教えている。そしてどちらにも、この世での生活を豊かなものとし、永遠の幸福を得る備えをするよう勧める天父のすばらしいみ言葉が載っている。」(「大会報告」1936年4月)

### デビッド・O・マッケイ

「私は、モルモン経が確かに神のみ言葉であると証申しあげる。また天と地との交流が再開され、真心からキリストを信ずる人々が必要な知識や祝福を受けることのできる正しい方法が、地上の人々に示されたことを証する。」(「インストラクター」1952年10月号、p.318)

「(モルモン経)はすばらしい書物である。それは回復された教会の重要なかなめ石のひとつである。」(「インブループメント・エラ」1960年11月号)

### ジョセフ・フィールディング・スミス

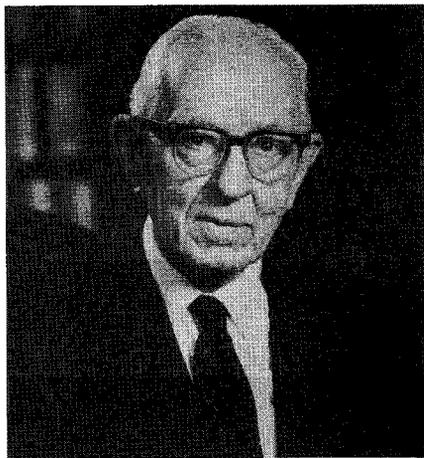
「私がモルモン経を読み始めたのは執事



デビッド・O・マッケイ

になる前のことである。それ以来ずっと読み続けている。私はモルモン経が真実であると確信している。……いかなる教会員といえども、モルモン経をくり返し丹念に読み、まさにそれが全能者の靈感を受けて書かれた記録であること、またその歴史が真実であることを証できなければ、満足はできないであろう。……これらの記録（モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠）は非常に貴重なものである。……その中の教えに従ってこそ、私たちはもっと神に近づくことが許され、天父と御子イエス・キリストをさらによく理解することができるのである。そして天父と御子により親しみ、すばらしい救いの計画についてもっと詳しく知ることが許されるのである。実に救いの計画は、私たちと世の人々に与えられたものであり、それを受け入れることによって神の王国に引き上げられ、王国の完き<sup>つた</sup>を受けた神の娘、息子となることができるのである。

私は皆さんに証したい。モルモン経は真



ジョセフ・フィールディング・スミス

実である。ジョセフ・スミスは、遣わされたみ使いを通して神のみ手からモルモン経を受け取った。その同じみ使いが、この世にある間にその記録を書き終え、この時満ちたる神権時代にそれが世に現われるよう、みずから手で隠したことを皆さんに証する。」（「インブループメント・エラ」1961年12月号、pp.925-26）

### ハロルド・B・リー

「今日、大勢の人々が世の哲学と聖書の聖句を混同し、聖句の真の意味を見失っており、聖書の品位を落としている。そのような中で、ご自分の子供たちの霊の幸福を絶えず心にかけておられる永遠の父が、予言者たちによって主が教えられた通りに記され、語られた聖書の真実性を支持するものとして、私たちにモルモン経という聖典を与えてくださっていることは、何と恵まれたことであろうか。このもうひとつの証によって、私たちは古代の予言者の教えの意味や、この世にあって人々に教えておら

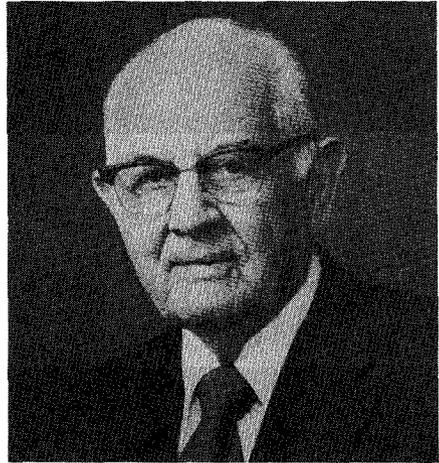


ハロルド・B・リー

れた主や弟子たちの教えの意味をより明確に知ることができるに違いない。モルモン経は、真理を心から求めてやまないすべての人々に、このふたつの聖典をひとつに合わせ、1冊の書物として学ばせてくれるはずである。そうするとき、私たちと同様に彼らもこのふたつの書物の真の関係を理解するのである。」「(あなたがたは世の光である」 pp.89-91)

### スペンサー・W・キンボール

「すばらしい経験についてお話させていただきます。ある週末、責任のために出かけていたときのことである。私はある1冊の特別な書物を携えていた。常に肌身離さず持ち歩いてきた本である。その本から目をそらすのは、寝るときか食事をするとき、または電車を乗り換えるときぐらいのものであった。私はこの書物のどうしようもないほどの魅力に、また感動的なまでのおもしろさに魅了され、とりことなった。そし



スペンサー・W・キンボール

て何度も何度も読み返した。読み終えて本を閉じ、深く椅子に腰をおろしていると、書いてあったことがほうふつとよみがえり、物語の中に引き込まれてしまう。私はどのページにもすっかり心を奪われてしまった。私にはこの書物が真実であるとはっきりわかった。……書かれているのは神のみ言葉であり、キリストを証するもうひとつの力強い証である。……そして最後の章には、この書物を誠心誠意でしかもそれが神から与えられたものかどうかを祈りの気持ちで読むならば、必ず確信が得られるという、決して破られることのない約束がなされている。……愛する友よ、私はあなた方にこの書物、すなわちモルモン経を贈りたい。そして、祈りの気持ちでこの書物を読み、熱心に研究し、真実かどうかの証を自分で得られるように願っている。」「(インブループメント・エラ」1963年6月号, pp.490, 493, 495)

# みたまの力を 毎日の 聖典勉強から

ブルース・T・ハーバー

娘のローリーが友達の家へ泊まりがけで遊びに行ったことがあります。寝る支度をしているときに、彼女はその日忘れていたことを突然思い出して、「あつ、きょうはまだ聖典を読んでいないわ」と言いました。ふたりの友達も読んでいなかったもので、1冊モルモン経を借りて一緒に読みました。聖典を読むことがこのような家族の日課になったのは、つい先頃のことです。聖典の勉強に関しては、我が家も教会のほとんどの家族とそう変わらない状態だったと思います。聖典を勉強しなければならないことは承知していました。勉強したいと思っていました。しかし、やってみてもあまり続きませんでした。そこでついに、聖典を読む習慣をつけようと、家族で一大決心をしたのです。その目標を目指して、私たちのステーク部の日曜学校会長のカーベル・ホワイティング兄弟が勧めている方法をとることにしました。

簡単な方法です。毎日何かしら読むのを習慣にすることを、まず第一の目標にする

のです。心構えを持つこと、聖典を意識の中に置くことが大切なのです。毎日どれだけ読まなければならないとか、このような読み方をしなさいとかはいっさい言われません。たとえどんなに少しでも、とにかく毎日聖典を読んで、ほんの1節でも読めた日がどれだけ続いたか記録をつけるように勧められました。

私たちはこの簡単な方法を実行して、日に数節とかあるいは10ページとか読みました。1章1章読み進んだり、テーマに従って読んだりしました。この時間を使って、日曜学校のレッスンの参照聖句を読むこともありました。何章も続けて読みながらときどき別の聖典に移ったり、特定のテーマに的をしぼったり、読み方はいろいろでした。

次に2番目の目標として、1日に1章（または30分、あるいは5ページ）読むことにしました。この第2目標がもし果たせない日があっても、1節でも読んでいる限り毎日聖典を読む習慣は続いているわけで、

その点では依然成功と言えます。

続いた日数を記録することは、動機づけにも励みにもなって役に立ちました。10日、1カ月、2カ月、半年、1年というように目標を立てると区切りになり、我が家ではそのときに表彰したり賞品を出したりしました。その頻度やほめる方法は年齢によって様々だと思います。たとえば我が家の子供はまだ比較的小さいので、下の子供たちには10日ごとにささやかなほうびを与えました。

この計画のおかげで、重い腰が上がりました。この方法を用いた初めの2年間に、家族がそろって読むのを休んだ日はたった2日でした。1年以上続いたのは3人で、最高は長男のトミーが446日の記録を作りました。8歳から9歳にかけての年でした。上のローリーとトミーはこれまでにモルモン経、高価なる真珠、創世記を読みあげ、新約聖書に進んでいます。

意図するところは、もちろん毎日聖典に触れる習慣をつけることです。その習慣を身につけるための方法が別に重要なわけではありません。大事なのは、聖典が日常生活に欠かせないものだという認識を培うことです。

聖典を毎日読んでいる私たちやほかの家族は、主のみ言葉が生活に力強い影響を及ぼすことを知りました。最初に気づいた変化は、聖典やそのほかの霊的な事柄が生活の中で優先され始めたという事実です。それらについて以前よりよく考えるようになり、霊的な事柄から離れているもの足りない気がしました。決まったスケジュールを変更してでも聖典を読む時間を取ったほどです。ある日、妻のジーンと子供たちが夕方職場がひけた私と落ち合って、近くの

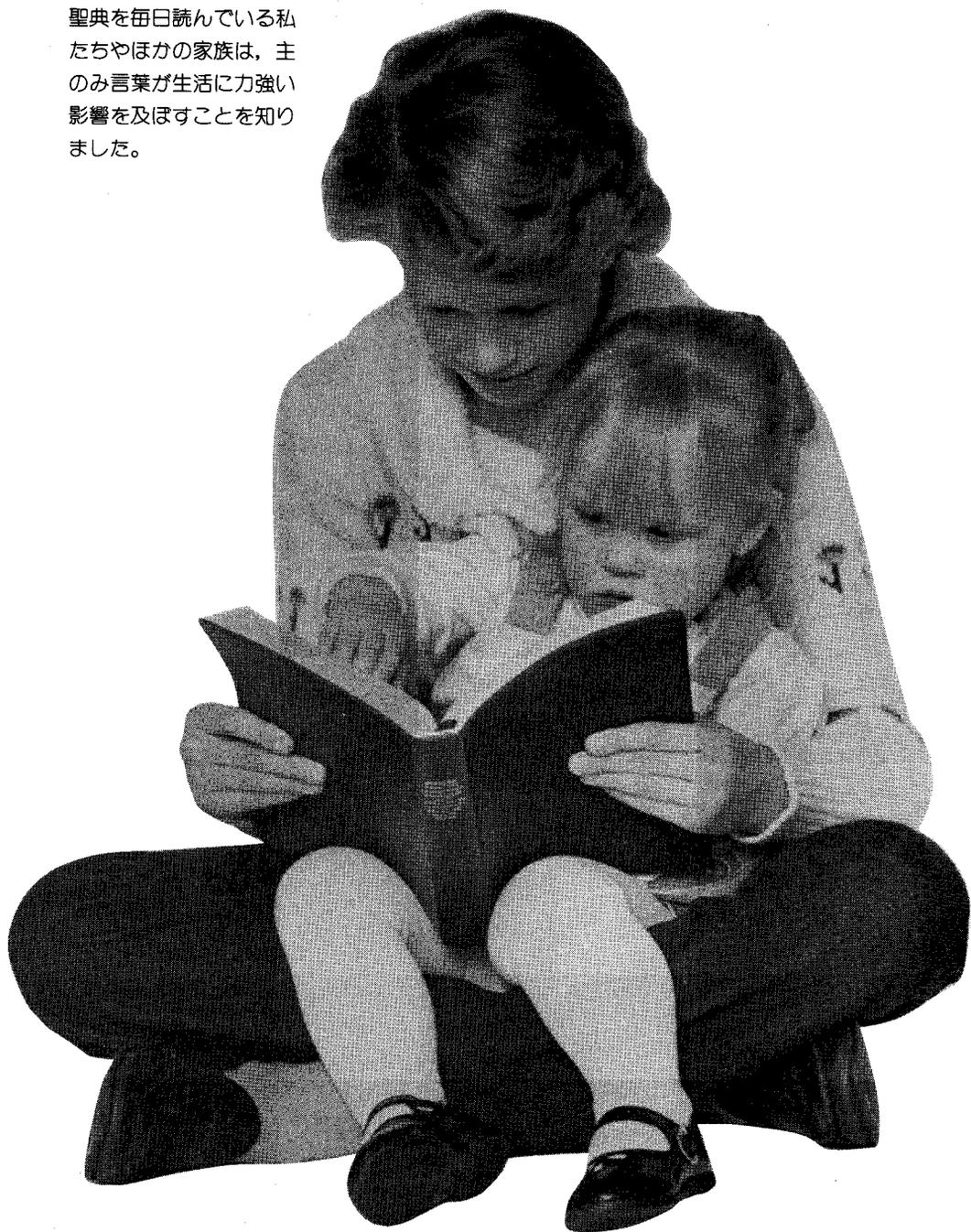
町の友人を訪ねることになりました。子供たちは帰宅するまでに眠ってしまうかもしれないということで、聖典を車に持ち込み、途中で読みました。

家庭で聖典を優先することは、小さい子供たちにも影響を与えました。どんなに幼くとも家族のほとんどが聖典を読むことに参加できたのです。毎日聖典を読む計画を始めたとき、2番目の娘のシェリーはまだ5歳で、息子のデビッドとリチャードは3歳と1歳半でした。だれも読めないで、上の子供たちに聖典物語の本を読んでやるように頼みました。シェリーが読めるようになってからは、彼女が弟たちに喜んで読んでやっていました。こうして我が家の子供たちは、弟や妹に聖典の物語を読んであげながら成長しました。

ある晩、ジーンと私が教会の別々の仕事でふたりとも外出しました。私は早く帰って子供と一緒に読む時間は取れるだろうと思っていたのですが、予定より集会が長びいてしまい、帰宅時刻が9時になりました。子供たちの就寝時刻はとっくに過ぎていました。ジーンはすでに帰っていて、子供は皆眠っていました。「聖典は読めなかっただろう」と聞くと、「いいえ、ローリーとトミー（このときは10歳と8歳でした）が、私が帰る前にみんなを集めて読んだのよ」という返事でした。子供たちが自分たちからそのようなことをしたのは初めてのことでした。

私たちのワード部のシュール夫妻は、家族で毎日聖典を読むことの成果を力説しました。長男のスティープンはすでにモルモン経を読み終えましたし、娘さんのキムは、普通に聖典を読み進む代わりに関心あるテーマごとに聖句を拾い読みしました。特

聖典を毎日読んでいる私  
たちやほかの家族は、主  
のみ言葉が生活に力強い  
影響を及ぼすことを知り  
ました。



に再降臨のテーマは興味深かったそうです。

スミス家では、以前から家族で聖典を読むのがならわしになっていて、標準聖典はみな読み終えていました。しかし毎日読むという目標を立ててからは、週に5日が7日に増え、子供たちが読むのを前より楽しみにするようになりました。親に言われてするのではなく、自分たちから進んで読むようになったとのこと。娘さんのジョディーはもう1年以上続けています。

あるワード部で若い女性のキャンプが

毎日聖典を読むと知識が増すとともに、ほとんどの人は、個人としても家族全体としても気持ちがみたまに近くなります。



あったときのことで。就寝まぎわになって無念そうな声が聞こえました。「ああ、残念。きょうは聖典読むのを忘れちゃった。」すると別の声が「そうだ、私も」と続き、ほかに何人もの声がしました。だれも聖典を持って来ていなかったため、リーダーと若い女性たちは、聖典から自分の好きな物語を皆に話して聞かせました。思い出に残る経験でした。

毎日聖典を読むと知識が増すとともに、ほとんどの人は、個人としても家族全体としても気持ちがみたまに近くなります。ディーン・クレバリー兄弟の家族が、ある晩子供たちと福音書を読んでいると、7歳のリベカが「私、今とってもいい気持ちです」と言いました。家族で、そのときみたまが共におられることについて話し合うと、ほかの子供たちも、自分もみたまに近い気持ちがあるとしました。

ワード部のある家族は、毎日家族で聖典を読むおかげで、家族の祈りを始める気になり、家庭の夕べも毎週するようになったと言っています。みたまの働きをよく感じるようになり、神と自分との関係を前より意識するようになったと言う人が大勢います。

家族そろって毎日聖典を読むと、家庭に一致と調和が増すと言う人も多く、問題の解決や福音の勉強について貴重な機会にも恵まれます。

家族で読めば原則を自分たちの生活に応用でき、それによって、愛と調和の精神で有意義な家族の話し合いができるようになります。福音の原則や聖典の物語が夕食の話題によく上がります。

毎日数節でも読むことで、その人の生活に大きな祝福がもたらされるのです。この

計画を教えたカーベル・ホワイトティング兄弟は、「毎日聖典を勉強した直接の成果という、自分が根本から大きく変わったことです。これは初めての経験です」と語っています。毎日聖典を読むこと、つまり毎日主のみ言葉を味わうことは、力強い影響力

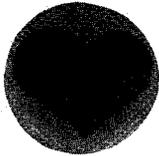
を持つ充実した経験であり、聖霊を私たちの日常生活に迎える力なのです。

\*ブルース・T・ハーパー：5児の父、教会伝道管理部伝道資材部長。ソルトレーク・バトラー・ウェストステーク部バトラー第18ワード部の福音の教義クラス教師



## 感謝祭に祈るんだけど……

ジョン・スワンソン 訳・石森茂幸  
(仙台ステーク部郡山支部)



今 祈りたいことがたくさんあって  
何から祈ったらいいのかわからないくらい。  
心にあふれる感謝の思いを  
どう表現したらいいのかしら。



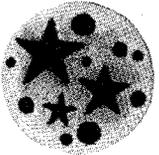
大好きな家族のことから始めたらいいの？  
それとも 愛？ 喜び？  
輝く太陽の光？  
平和？ 健康？  
それとも 幸福なことかしら！



すてきなおうち。  
空を飛ぶ鳥。  
それとも 夜空にきらめくたくさんの星？



天にいらっやいます愛するお父様。  
これらすべてのものに  
そして 口に出して言えない  
もっともっとたくさんのことに  
心から感謝いたします。



でも お父様。  
一番感謝しているのはお父様です。  
お父様はいつも  
そばにいてくださるのですもの。

# 質 疑 応 答

●本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

私は教会は真実だと思います。  
しかしときどき疑うことがあります。  
どうしたら確信を持てるでしょうか。



解答者

ジョージ・D・ダラント  
(ソルトレーク・マウン  
トオリンパスステーク  
部、マウントオリンパ  
ス第3ワード部監督)

**あ** あなたの質問はあらゆる質問の中でも最も重要なものだと思います。しかも答えを見たいという心からの願いが伝わってきます。この神聖な問題について討論する際に、まず私がしたいことは、あなたを愛していると告げることです。ジョセフ・スミスは予言者であり、イエス・キリストは贖い主であること、そして末日聖徒イエス・キリスト教会は主の聖なる教会であること、これらを人の霊に啓示することのできる霊的な経験を討論し、理解するには、愛と真理のみたまによる以外にな

いからです。

アルマは真理を知るための公式を教えてください。(アルマ32：28-43参照)主のみ言葉のほんの一部でも、心の中に受け入れるほどに信じることができれば、そのみ言葉が真実かどうかを実際に試して決めることができますと言っています。

心の中でこの種の試しをすることを、アルマは種を蒔くことになぞらえています。もしもその種が善い種であって、私たちが不信心の心でこの種を抜き取ったり、主のみたまに逆らったりすることがなければ、種は次第に胸の中でふくれ始め、それが善い種であることがわかります。(アルマ32：28参照)

言い替えれば、教義について深く考えること、誓約を守ること、態度を変えること、奉仕をすること、これらが心の中に種を蒔くことなのです。これをした後で成長や満足や喜びを感じずなら、善い種であったことがわかるのです。さらに種が成長するにつれて、私たちの思いや行ないが善であることがわかります。この小さな木を養い育てるならば、やがて大きくなって霊的な飢えを満たす甘い実を結び、渇いた霊をうるおす水ともなります。

あなたの質問に対する解答としてはアルマの教え以上のものはないと思います。これは私の経験ですが、彼が説教したことはまさにその通りに実現するのです。

人はだれしも霊的な春の始まりを迎えるときがあるものです。なすべきことをなし、変わるべき方向に変わり、期待されている奉仕を行なうことで永遠の大いなる種を蒔き、やがてその種がふくらみ、生長し、そ



私たちは教会が真実であることを今完全に知る必要はありませんが、その望みは持つべきです。

の存在を否定し得ないほど善い実となって私たちの霊を満たすのです。やがてほとんど気づかないほどかすかでゆるやかな春の訪れとともに、自分に知識があること、またその知識は見いだしたばかりで完全な理解ではないことを知るのです。それから研究と奉仕と祈りによってかよい木を養い育て、教訓に教訓、規則に規則(イザヤ28:10参照)を加えられ、それから打ち消しがたいほど強い証を得て豊かな実りがもたらされます。

青年時代を通じて、私は霊的な土壌を耕してきました。心の中に祈りの種を蒔き、神が存在することと祈りに答えてくださるという知識が生長するのを実感してきました。ホームティーチングや教会のほかの責任を果たすことで奉仕の種を蒔き、その種

が次第にふくらむのを感じてきました。そしてそのことから同胞への奉仕がすなわち神への奉仕であることを知ったのです。また什分の一を納めることにより、天の窓が開かれる喜びを味わってきたのです。(マラキ3:10参照)

このほかにも様々な考えや思い、決意があつて、以前にも増して強い種を蒔くことになりました。伝道の召しを受けたのです。

主が私に伝道の業に仕えるよう望まれていることを監督から告げられると、監督の部屋を後にして仕事場に直行し、伝道に出る旨を上司に告げました。「それはいい。すばらしい訓練ですよ。帰ってくるときにはきつと自分の意見をもっとはっきり言えるようになるでしょうし、もっと自信をつけるはずですよ。」上司はさらにこうも言い

ました。「教会をしょって立って、福音が真実であると知っているなんて言わないことですよ。わかるわけないんですからね。そんなこと言う人はうそつきですよ。真実だなんてわかりっこないんだから。」そのときは教会が真実であることを知っていると言えず、ただ真実であると思っただけ言いました。

宣教師として英国に赴任して2カ月ほどしてから、最も豊かな収穫のときがやって来ました。初めの数週間はさっぱりで、ホームシックにかかり気がめいっていました。そんなときでも、よい宣教師になりたいという強い望みだけは持っていました。私はハル地区にいる別の教会の宣教師7人にジョセフ・スミスのお話を聞かせる割り当てを受けました。私は、熱心に祈りの気持ちで準備し、心の中にこれまで蒔いてきたことを述べました。私のメッセージは最初言葉だけでしたが、それから何かが起こったのです。言葉に尽くせないほどの喜びに霊が満たされ、胸の高鳴るのを感じました。心の中に聖なる森とジョセフ・スミスが見えました。ジョセフが父なる神と御子イエス・キリストに会われるところも見えました。そして、それが善いことであって真実であるなんて考えませんでした。知っているのですから。伝道から帰ると、以前の上司の前ではっきりと、教会が真実であることを知っていると言いました。そうしなければ、私の中に実った非常にはっきりとした収穫を否定することになったでしょう。

あなたの経験は私とは違った経緯をとるかもしれませんが。それでも結果は同じだと思います。

子供のときから教会が真実であることを知っている人もいます。その人たちは常に霊的な証を持っているので、このことが問題にはならないのです。私たちも皆そうありたいものです。しかし彼らも霊的な春、すなわち新しく種を蒔く時を迎えます。もし蒔かなければ、実は結ばないのです。イエス・キリストは私たちに種を蒔くようにと、次のようにチャレンジしています。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ7：17)

キンボール大管長は「Do it (実行)」という言葉で種を蒔くように勧告しています。伝道に行き、神殿で結婚し、什分の一を納めてください。同胞を愛し、正直であり、よきものをたずね求め、不正を働かず、現在やっていることでも正しくないとか進歩を妨げるとかわかっていたらやめてください。私たちは教会が真実であることを今完全に知る必要はありませんが、その望みは持つべきです。ベンジャミン王の説教を聞いたニーファイ人のように、「悪を行う性質をなくして常に善を行う」(モーサヤ5：2) ことです。

伝道に出る前と出たばかりの頃の私は、教会が真実であることを知りたいと願っていました。しかし最大の関心事ではありませんでした。私にとって大きな課題は、よい宣教師になりたいという熱烈な願いでした。その目標に向かって努力しながら、直接的というよりは間接的に、教会が真実であることを知るようになったのです。



前が見えるように、しかし助けを必要としている人が見えなくなるくらいに、頭を高く上げてください。

初めての伝道から何年も経て伝道部長として働いているときに、ひとりの長老が私の所に来て、教会が真実であることがわからないと言いました。彼は家に帰りたいたと思っています。私は帰らないように説得して彼に言いました。「『家に帰りたいた』とそればかり考えていたら、決して教会が真実であることなんかわかりませんよ。そんな信仰のないことでは、答えを与えてくれるはずの種を心から追い出していることとなります。あなたがまず口にするのは、『私はとどまろう。教会が真実かどうかは問題ではない。とどまろう』ですよ。」つまり私は彼に、心に蒔く種はとどまって仕えるという誓約の種であって、結ぶ実は証と

いう甘い実だと話したのです。

「どうしたら確信を持つことができるでしょうか」という質問に対する答えは簡単です。み業に全身で飛び込むことです。教会が真実だろうかと考えている事実は、少なくともつま先を水に入れている証拠です。確信を持つには、飛び込まなければなりません。やる前に福音が真実であるかどうか知りたいと思っている人もいます。無駄なことに骨を折りたくないと思っているのです。しかし私はまずやってみてそれから知りました。求めている答えを得るには、あなたも同じようにすべきではないでしょうか。

「それはもう全部やってみました」と答

えるのなら、私はこう言います。「もっとやってみてください。」ほかに方法はありませぬ。全力で飛び込んで、それが正しいかどうかを主に尋ねてください。真理を学ぶのに努力してください。「座りこんで」主に証を求めようなどとはしないでください。そうではなく、「やってみて」、主に証を願ひ求めるのです。あなたの鎌に信頼を寄せれば、霊の麦の刈り入れがわかるでしょう。(教義と聖約 4 : 4 参照) 刈り入れを始める前に麦が現われることを期待しないでください。信仰を持ち、いつも信じていてください。

あせらずに、教会が真実であるという霊的な探求をしてください。それは小さな苗に手をかけて大きくするのに似ています。自然にしかも確実に育ててください。険しい道を登らずに山の頂上にたどり着こうなどと思わないことです。人生は織物のようなものです。日常生活という糸を織らないで、ただ座って霊性を織ることはできません。自分の道からそれたり、果てしなく長い祈りを捧げたりする必要はありません。また、奉仕プロジェクトを求めて遠い所に旅をする必要もありません。進みながら祈り、進みながら奉仕し、どうしたら自分を向上させることができるかを知り、世界のどこに行こうとそこを幸せな場とすることができるように心を向けることです。霊的な種が生長する温かい土壌を作るのは、両親や知人たちといかにつき合い、いかに奉仕するかにかかっています。

人生を前向きに歩んでください。前が見えるように、しかし助けを必要としている人が見えなくなるに、頭を高く上

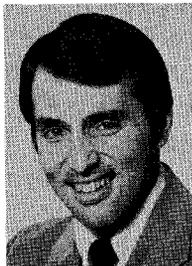
げてください。しばしば祈ってください。そして感謝と献身の言葉に加えて、あなたの疑問や望みに対する霊的な確認が得られるよう願ってください。いつも心を祈りの気持ちで満たしましょう。

奉仕し、愛し、研究し、祈ることを決意してください。神はあなたの傍らに来て、あなたに触れられることでしょう。また聖霊はあなたの霊に、イエスがキリストであり、ジョセフ・スミスが天父とイエスにまみえたこと、モルモン経が真実であること、福音が回復されたことを証するでしょう。そしてあなたは、イエスにより罪を贖われ、回復された主の教会の神権により執行される聖なる儀式を通して清められ、日の光栄の王国に入ることができることを知るのです。

簡単なことです。確かに簡単です。必要以上にむずかしくとらえていると、常に学んではいても、いつになっても真理の知識に達することはできないでしょう。(IIテモテ 3 : 7 参照) 簡単ではあっても、完全なる努力を要するところにむずかしさがあります。多く与えられるところには多く求められるのです。

主の道に飛び込んでください。種を蒔いて養い育ててください。そうすればいつの日か遠くから真理を知り、天父なる神が自分に対して何を望んでおられるかを自由に知ることができるようになり、しかもその通りの人物になることができます。あなたの質問に対する答えは、まさしく永遠の未来の扉を開ける鍵です。あなたが求めているのはまさしく高価なる真珠であって、あなたの持ち物すべてに匹敵するものです。

ホームティーチャーとして、  
後輩の同僚を励まし活発にするには  
どうしたらよいでしょうか。



解答者  
H・ケント・ラップリー  
(アリゾナ州テンピ、  
セミナー教師)

ホームティーチャーの同僚となるアロン神権者が十分に教育されていれば、成長するとともにホームティーチングに期待を寄せるはずでず。そのためには、経験豊かなメルケゼデク神権者が若い同僚を助けて、ホームティーチング・プログラムの中で効果的で大切な役割を果たせるようにすべきです。

下記にあげる提案は、アロン神権者に積極的な参加を促して成長を助けるものです。若い同僚を助ける過程で、担当の家族との



関係も大いに改善されるのを実感できると思います。

1. 後輩の同僚にメッセージの一部を伝えるように頼むこと。もちろん、「聖徒の道」を渡して「君が今度メッセージを伝える番だよ」と言うだけではいけません。あなたも一緒に参加し、協力してメッセージを伝えることです。すべてが同じという家族はないのですから、各々の状況にあてはめてメッセージを伝える方法を話し合います。それから伝える際に主の助けを求めてください。

2. 後輩の同僚に家族の誕生日や特別な出来事、たとえばバプテスマ、祝日、卒業、記念日などを調べてその機会を逃さないように責任を与えること。カードやパーティー、高価すぎない贈り物など、方法は限りがないと思います。ふたりで誕生日の子供を公園やスポーツの試合、映画などに連れて行く方法もあります。片親や年配の方々にとっては、特別な問題のときにあなた方の援助を約束する回数券なども効果的かもしれません。

3. 特別な場合だけが担当家族を助けるときでないことは当然です。どうやったら有意義な助けになるかを同僚に教えてください。たとえば未亡人や片親家庭では、自分たちではできない庭仕事や簡単な家の修理にお金を使うべきではありません。ホームティーチャーも一緒に庭の雑草を抜いたり、壊れた所を修理したりすることができます。もっと大きな仕事でしたら、後輩同僚は所属の神権定員会を使って奉仕活動することもできます。

4. 多くの若い男性は家で弟や妹の世話

をする訓練を受けています。もし担当家族に小さな子供がいたら、両親が神殿に参入する間、あるいは糸図や伝道活動をする間に、後輩同僚が子供の世話を申し出ることもできます。(もちろん無報酬です)この種のことは、家族が定期的に神殿に参入するときなど、毎月でも可能です。

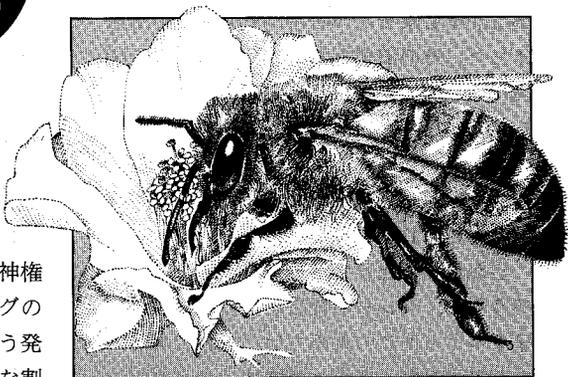
5. 後輩同僚が自分の才能や趣味を使って担当家族を助けるよう励ます。木工が好きなら、家族を助けて家具作りもできます。またスポーツや音楽や芸術が趣味なら、子供たちの技術や才能をみがいて、自信を持たせるという方法もあります。

6. 担当家族のひとりに病を癒す儀式を施すように依頼されたら、ときには後輩同僚を呼んで一緒に連れて行くといでしょう。同僚がアロン神権者の場合は実際に儀式を施すことはできませんが、適切であれば灌油かんゆの儀式の前に祈りを捧げることができます。ほかの人の信仰と祈りを目のあたりにし、さらに自分自身の信仰をも強めるすばらしい機会を通して多くのことを学ぶでしょう。(ただし、何をしてほしいか事前によく話しておくようにしてください) 担当家族、もしくは家族のひとりが特別に必要なとしているときに、あなたと共に断食と祈りを捧げることで、同僚は霊的に大きな成長を遂げることでしょう。

7. 訪問する家族の子供たちにとって、後輩同僚の模範がいかに重要であることを理解させること。正しい服装の標準を守り、同世代の流行や諸々のプレッシャーを避け、ふさわしい映画や娯楽を選ぶことで得られる祝福を、外見や行動を通して子供たちに教えることができるのです。

# 養蜂家

スコット・サミュエルソン



**神** 権会の開会行事のとき、アロン神権の教師たちにホームティーチングの新しい先輩同僚が割り当てられるという発表が監督からありました。私は、そんな割り当ての変更につきものの静かな興奮を胸に、だれが自分の同僚になるだろうと考えながら礼拝堂を出ました。廊下を歩きながら、若くて元気な長老と組めたらいいと思いました。廊下わきの空いている教室の中を見ては、召しに熱心な霊的で力強い兄弟と一緒に働くのを想像しました。廊下の突き当たりが扶助協会室で、そこは大祭司の集まる部屋でした。

その横にある階段を昇るときに、部屋の中をちらっとのぞくと、すり切れそうなグレーの背広を着た年取った兄弟が腰かけているのが見えました。彼は指を組み、思いにふける様子でぼつんと座っていました。丸い縁の眼鏡をかけて、しみの目立つ沈んだ顔色をしていました。その兄弟は前に見たことがありましたが、名前は知りませんでした。一瞬、私には彼が同僚になってほしくない人の代表のように感じられました。

どうか、彼とは一緒になりませんようにと心でつぶやきました。年を取りすぎています。

2階で、教師定員会のアドバイザーが、私の同僚はオリバー・ジョンソン兄弟だと教えてくれました。名前を聞いても何もわかりませんでした。説明によるとその人は年配の大祭司で、丸い眼鏡をかけ、グレーの背広を着てくることが多く、養蜂ようほうの仕事をしているとのことでした。それならば彼です。つい今しがた階下で見かけたあの兄弟です。私はひどくがっかりしました。さっき彼についてあのようなことを考えたからだと自分に言い聞かせてみても、不満は軽くなりませんでした。むしろ、活発で若い、知っているだれかであつたらよいのという気持ちが前より強くなりました。

私は良い同僚になりたいと思いましたが、それでも、話すのも歩くのもゆっくりな年

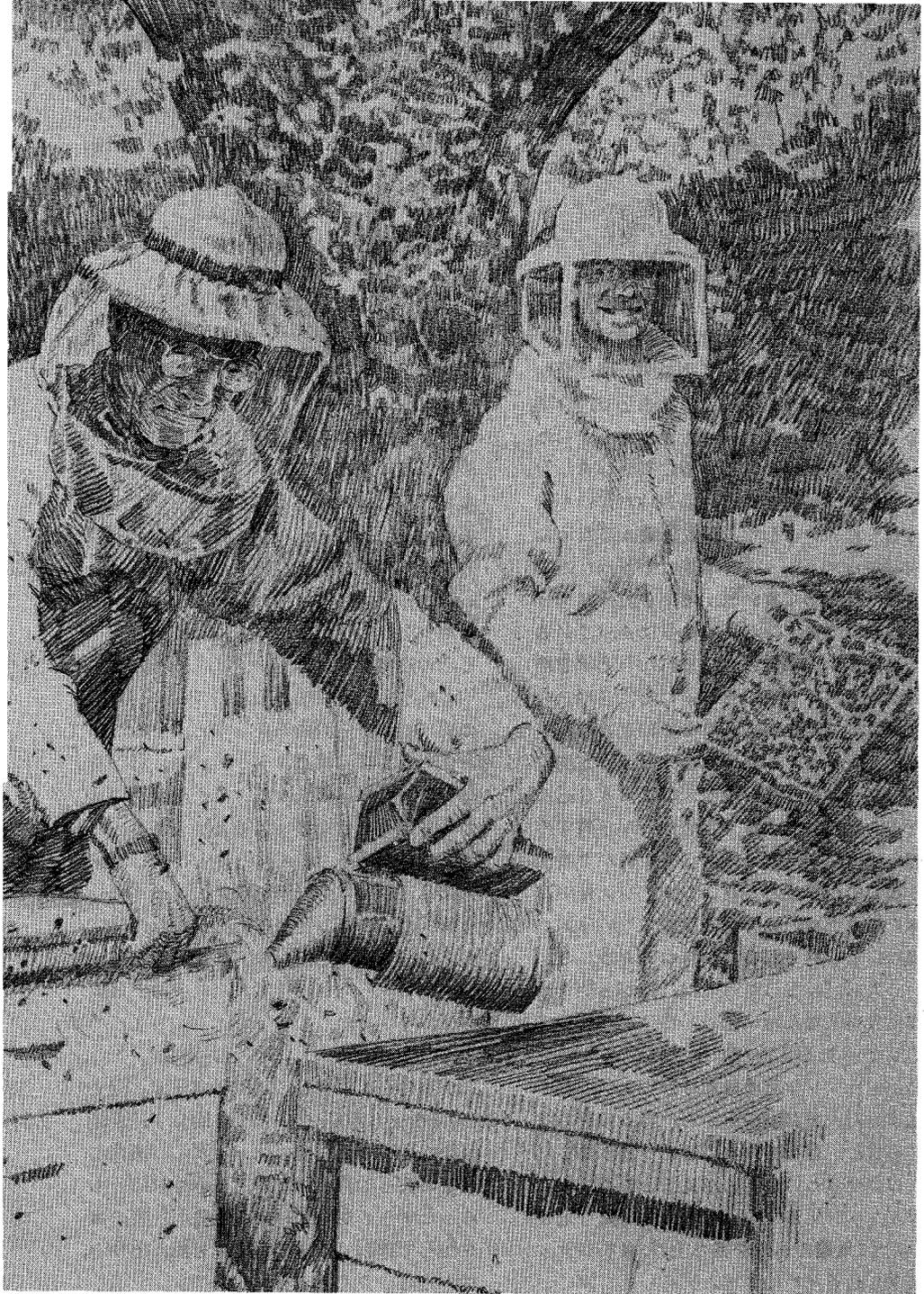
取った兄弟の同僚という割り当てを喜ぶ気持ちになれませんでした。特にその兄弟の運転が気にさわったのを覚えています。私は待望の運転免許証がもうじき取得できるというときで、自分より上手なドライバーはいないと思ひ込んでいました。同僚として出かけた初めてのときに、ジョンソン兄弟は20年も乗っている古い車を運転して来ました。その旧式な車で、制限速度より確実に遅いスピードの運転でした。またジョンソン兄弟は、のんびりと落ち着いた運転に加えて、じっくりゆったり話をしました。たぶん、血気さかんな私のイライラいや気を感じられたことでしょう。

しかし、ふたりで毎月担当家族を訪問するうちに、グレーの背広を着て古ぼけた帽子をかぶったこの人の力は、経験であることが私にわかってきたのです。ジョンソン兄弟は、夫婦で召された伝道について話してくださいました。(この伝道中に奥さんが亡くなったのですが、それでも兄弟は、埋葬をすませてすぐ伝道に戻ったそうです) インディアンが通る道やみつばち蜜蜂や、私には別の時代と思える人々についていろいろ話してくださいました。

話をするにつれ、私の批判的な気持ちはしだいに消えていきました。遅い運転にもイライラしなくなりました。それだけ話す時間が長く持てるのです。古い自動車、おかしい眼鏡、よれよれ帽子にガラスの欠けた懐中時計、それが少しも気にならなくなりました。ジョンソン兄弟は若返ったようでした。彼の長年の経験が私の心に流れ込み、その分私がいくらか年を取ったのでしょう。

いろいろ聞いた話の中で一番興味を引かれたのは、養蜂の仕事の話でした。初夏の





ある日、ジョンソン兄弟から電話があって、これから蜂の様子を見に谷へ行くというのでした。私も行かないかと誘われました。峡谷を車でゆっくり登る間、ジョンソン兄弟は養蜂を始めたいきさつや、蜂にたっぶり蜜を作らせる方法を話してくださいました。舗装道路が終わって、土ぼこりの舞うでこぼこ道に入り、ときどき小川も越えました。何度か車を降りて羊の囲い場の門を開け、ジョンソン兄弟の車を通して門を閉じてから、また車に乗って先へ進みました。

ようやく巣箱のある場所に到着しました。ジョンソン兄弟が蜂よけの古いおおいを貸してくださいました。顔を保護するためにつばからメッシュの布が垂れ下がった帽子でした。兄弟に言われて着てきた長袖シャツの袖口のボタンがしっかりはまっているか見直すように言われ、それから手首を締めるゴムバンドをもらいました。ズボンのすそはくつ下の中に入れなさいと言われました。ジョンソン兄弟は自分もその支度をしながら、もし蜂が袖やズボンに入り込んだら、出られなくなって恐怖心から刺すのだと説明してくださいました。彼が手袋をしないのは驚きでした。ジョンソン兄弟が蜂を扱うための発煙筒を用意している間、蜂にはよく刺されるのか尋ねてみました。

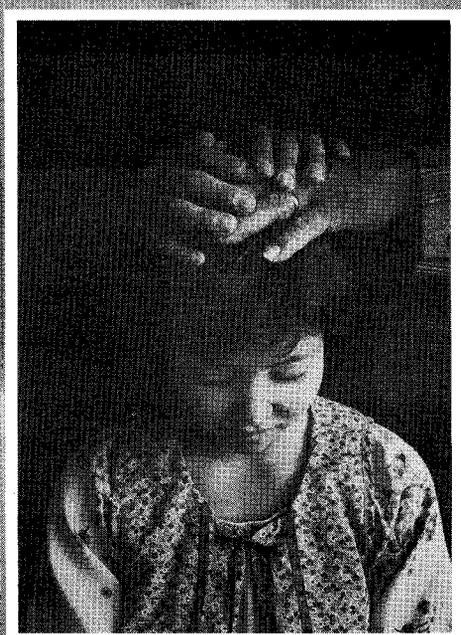
「ああ、しょっちゅうだ。怖がらせたり、知らない人なんかにはね。ボサーツとしてでもやられるよ。パニックのときも刺すね。」ジョンソン兄弟はそう言いながら私を見ました。おおいの下から、明るく輝いている目と、言っていることを十分承知した人のニヤツという笑いが見てとれました。ジョンソン兄弟はゆっくりと手順良く気をつけて、巣箱のふたを持ち上げ、蜂をリラックスさせるために煙を入れました。体にと

まるもの、むき出しの手をはうもの、頭のまわりをブンブン興奮したように飛び回るもの。でも兄弟はおじけず平気でした。私は離れた安全な場所で見ていました。蜂にとまられて刺される危険にあうのはごめんだったからです。

蜜蜂は良いもの、悪いものまちまちで、どれが悪くてなぜ蜜ができないのかをジョンソン兄弟がちゃんと見分け、処置をするのには感心しました。その日は蜜は何もとらなかったのですが、とれたら私に分けてくれると約束しました。ジョンソン兄弟は、蜜を含んだ蜂の巣をかんで蜜蠟みつろうを吐き出してごらんと言いました。そうして自分で苦労して味わう蜂蜜はただなめるよりもおいしいと言いました。言われたときはわからなかったのですが、試してみると、なるほどその通りでした。

それから数年して、伝道中の私に、新聞の切り抜きが同封された母からの手紙が届きました。切り抜きのトップには、私に蜜蜂のことや年配の人たちのことやほかにもたくさんのことを親切に教えてくださいました彼の写真が載っていました。その死亡広告にあるジョンソン兄弟の顔は、よそよそしく無表情でした。記憶にある扶助協会室でのあの顔とまるで似ていませんでしたし、蜂よけバールのかげから見たあの顔とは似ても似つかないものでした。もちろんパウロのように「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか」と言うことはできます。でもこの紳士、この兄弟の死去を聞いて、哀惜の念にたえませんでした。しかし、蜜蜂を大事に養って得られた蜜、自分も分けてもらったまるやかな甘いあの蜂蜜と、蜂の巣をかんで味わったあの蜜の味を思い出すと、私の心はいやされ、なごむのです。

# 任 命



フレッド・A・ロウ

あなたはこれまで、雲の上に昇って上から雲を見下ろしたことがありますか。雲は下界からと上からとでは違って見えます。私たちの見慣れているのは、うず巻くような積雲や軽やかな巻雲や暗く不気味な乱雲です。また雲は流れ、雲の天井の間から時折青空をかいま見ることができず。

ところがその雲の上に行くと、様子は一変します。特に海拔1万メートルを飛ぶジェット機の窓からは壮観です。雲が山や谷のように見え、刻々と流れるように姿を移すさまは大河や溪流けいりゅうのようです。雲に影のあることはご存じですか。高い空を飛ぶと上はただまっ青な空で、眼下には雲の影が別の雲に映っています。

白い雲がときどき途切れて、何千メートルも下の川やハイウエーが、白い額縁にはまってちらっと見えます。灰色や青や赤の町の屋根と、黄色や緑や茶色の畑が対照的で、子供がアート紙の上に置いた幾何学模様のようなのです。

このように、雲の上では新たな展望が開けてくるのです。

教会では毎年、監督会がアロン神権と若い女性の指導者を大勢「任命」しています。

任命 (set apart) という言葉を造り出した人は感ずるところがあったに違いありません。set apart (英語では「別にする」という意味がある) されることは、雲の上を飛ぶのとよく似ているからです。若人の指導者になると、あなたはある意味で世のほかの人たちから分けられます。物事を違う目で見、違った標準で検討し、行動しなければならぬのです。

福音回復の予言者、そして指導者となる

ように選ばれた少年ジョセフ・スミスは、父なる神の訪れを受け、愛する御子エホバを紹介されたとき、今ならば教師定員会会長の年齢で、世から「分けられ」(任命され)ました。そのとき主は、どの教会にも加わってはならないとジョセフに言われました。少年のジョセフは、もはやそれまでの生活に後戻りはできませんでした。前途には指導者としての新しい道が敷かれていたのです。危険な、自己を捨てた奉仕が要求される道、しかし奉仕する人々からは素直な愛と忠誠がもたらされる道でした。ジョセフ・スミスは人々を導くべく永遠に「分けられ」たのです。彼は人生と同胞に対して、新たな高い展望を得たのでした。

指導者の召しはあなたに変わることを要求しますし、その機会も提供されます。今までの仲間は今やあなたが霊的に責任を負わなければならない人たちですし、それまではただ参加していた活動が、これからはあなたが自分で計画し、組織しなければならないものとなるのです。アドバイザーや監督会は、今はあなたの同僚です。これからは発表を聞く側ではなく、発表する側です。あなたは、指導者らしく行動するように指導者の召しに「分け、任じられた」のです。

今の召しを受ける前に、きっと何も予告はなかったと思います。まだ若いですから、指導経験もそうないはずで、自分が指導者になるなど、考えてもいかなかったかもしれません。しかしながら、主のためにも、また自分のためにも立派になしとげて満足が得られるように、自分を有能な信頼される指導者として自覚できなければなりません。新約聖書には、新しいぶどう酒は古



あなたは、  
指導者らしく行動するように  
指導者の召しに  
「分け、任じられた」のです。



い皮袋に入れられず、また真新しい布ぎれで古い着物につきを当てることはしないと教えられています。あなたは、与えられた召しを果たすために成長しなければならないのです。

指導者は作られない、素質の問題だという神話は捨ててください。卑近な例がふたつあります。モーセはパロの宮廷で40年、さらに荒野で40年を過ごしました。彼は途方もなく大きな指導者の役目に備えて主が彼に用意させておられたことを知りませんでした。準備の80年を終え、聖なる山で召しをいただいたとき、モーセは深い恐れの中からこう答えました。「わたしは、いったい何者でしょう。わたしが……導き出すのでしょうか。……彼らはわたしを信ぜず、またわたしの声に聞き従わない……でしょう。……わたしは……言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重いのです。」

(出エジプト 3 : 11 ; 4 : 1, 10)

エノクは、自分に対して抱いているイメージを変えなければなりません。彼はしまいには力強い愛される予言者となって、その靈感豊かな働きからすべての民がひとつの心に一致し、民のお互いに対する愛があまりにも大きかったため、民全体が主の懐に取り上げられたのです。そのエノクは、はじめから近所の人々の人気をおのずと集める目立った人柄ではありませんでした。

人を指導する神聖な召しを受けたとき、エノクは仰天して主に問いました。「われ主の御目に適いしは何の故なりや。われは年行かぬ者に過ぎず、すべての人々われを悪む。われは口重き者なればなり、いかで汝の僕ならむや。」(モーセ 6 : 31)

監督は本当に靈感を受けて自分を召したのであるかと考える若い指導者たち、自分が割り当てをしたら定員会やクラスのメンバーに断られるかもしれないと考えるあなた方若い指導者たち、自分は神様の同僚として召されたこと、神様が自分に力を与えてくださることを確信してください。主はモーセを、こう言って励まされました。

「だれが人に口を授けたのか。……行きなさい。わたしはあなたの口と共にあって、あなたの言うべきことを教えるであろう。」(出エジプト 4 : 11-12) エノクに主はそう約束して励まされました。「行きてわが命じたる如く為せ。然らば、何人も汝を貫くを得ず。汝の口を開け、さらば充たさるべし。而してわれ汝に言うことを与えん。」

(モーセ 6 : 32) 主はエノクやモーセにされたことを、必ずあなたにもしてください。

あなたが召されて、支持され、任命されるとき、主はあなたを祝福されます。しかしながら、あなたの行動と動機がとても大事になってきます。穴のあいた器を主が満たされることはないのです。学ぶべき指導者の特性がいくつかあります。概念そのものは単純でも、それをしっかりと自分のものにしたとき、指導者としての影響力は、はるかに増すことでしょう。

上手に管理するために、次のことを身につけてください。

- 計画の立て方
- 計画後のフォロー (あと押し)
- 時間の上手な使い方
- 全体像をつかむこと
- 人を参加させること
- 集会の持ち方

## 計画の立て方

定員会やクラスのメンバーは、自分でやろうと思う以上のことはなかなかできないものです。目指すところは明瞭で、簡潔で、しかも柔軟でなければなりません。よく読まれているある本のタイトルが示すように、「目的地を持たない旅人は、何も得られないまま旅を終えてしまう」のです。

1. あなたの目標、神権の目的は何ですか。
2. それは妥当で有意義なことですか。
3. その目標のために、どんなことをしなければなりませんか。
4. そのための人と経費、時間がありますか。
5. いつまでにしなければならないことですか。
6. 配慮すべき事柄、してはならないことはどんなことでしょうか。

## 計画後のフォロー

行動が伴わなければ、計画もただの願望に終わります。みんなが仕事をするように常に期待を寄せ、それぞれに声をかけて、責任が果たせるように励ましてください。

1. 自分の「すべき仕事」を書き出し、頻繁に読み返していますか。
2. 集会の直後に、その集会で話し合われた、今後実行が必要なことをすべてリストに書き出していますか。
3. 活動や割り当てがあるのを忘れないように、ウィークデーにみんなに電話していますか。

## 時間の上手な使い方

時間がないということはありません。一番大切だと思う活動のためには、いつでも時間はあるものです。何が最も大切かを上手に決められるようになってください。時間の使い方を学んでください。埋め合わせできない貴重な1日24時間が、すべての人間に平等に与えられているのです。

1. 優先順位は決めましたか。
2. 目標の達成に役立つ活動は除きましたか。
3. 仕事を計画し、計画を実行に移し、計画した通りに行なっていますか。
4. ほかに人にも割り当てをして、一緒に仕事をしていますか。

## 全体像をつかむこと

「ああ、それでわかった」という大きな発見のおかげで、それまでのもやもやした頭はすっきりし、自信を持って我が道を進むことができるようになります。定員会やクラスの仲間に参加してほしいならば、今していることがもっと大きな計画の中のどんな位置を占めているのか、彼らに知らせてください。活動の価値や結果、ほかのアイデアや目標との関係を知らせてあげてください。計画の全体像は出し惜しみせずにご教えましょう。

1. 監督会やアドバイザーが抱えているさらに大きなビジョンがわかりますか。
2. 割り当てを与えるとき、その割り当てがなぜ大切で、プログラム全体にとってどういう位置を占めているか、説明していますか。

## 人を参加させること

成功するには責任を委任することです。ほかの人に割り当てを与えて、指導者としてさらに大きな働きができるようにしてください。計画を立てるときは、その計画を実行することになる人たちに必ず加わってもらいます。彼らが成功し、与えられた割り当てを果たせるように期待しましょう。グループ全員に働く機会を与え、成功するように一人一人を助けてください。長所をしっかりと見つけて、みんなが進歩成長でき

るように努力しましょう。

1. 「これはクラスや定員会の人でもできることではないか」と考えることがよくありますか。
2. 割り当てを与えるとき、仕事の目的、価値、時間、範囲をはっきり説明していますか。
3. ひとつのことをするのにいろいろな方法があることを理解して、柔軟な態度で成果を待っていますか。
4. 質問形式にして、途中で状況報告を受

グループ全員に働く機会を与え、  
成功するように一人一人を助けてください。





けていますか。

5. 割り当ての締めくくりとして、活動を報告してもらう時間を取っていますか。

## 集会の持ち方

仕事と集会は同時にできませんから、集会は短時間で効果的に行なってください。

1回ごとに計画を立て、何をしたいか、望む結果を得るにはこの集会で何をしなければならぬかを、よく考えましょう。どの会にも、目的と結論があり、また目的から結論に至るまでには、時間を有効に使うという課題があります。

1. しっかり計画を立てていますか。アジェンダ（協議事項を書いた表）は用意していますか。
2. 集会を管理する自信と熱意はありますか。
3. 歓迎のあいさつで、出席者を大切に思う気持ちを表わしていますか。
4. それまでの計画や割り当てを確認するために、議事録を読みあげていますか。
5. 出席者にとって気持ちの良い集会になっていますか。
6. 人々の気持ちや意見を認め、生かしていますか。
7. 参加者に感謝していますか。
8. 全員が考え方やねらいをはっきりつかんで帰っていますか。
9. 教師や話し手にバトンタッチするとき、ユーモアやほめ言葉や熱意を持ってその人を紹介していますか。
10. あなたは主と教会の良い代表者ですか。

## 結果の評価

簡潔で有効な計画だと評価が簡単です。

目標がどれほど達成できたかを見るだけで済みます。達成できたことを分析してから、これでは困るという事柄に的をしぼってください。

1. 目標はまず第一に実現可能で重要なものでしたか。
2. したことに満足できますか。納得のいくものですか。
3. もう一度するとしたら、今度はどんな方法でしたいですか。
4. だれに手伝いを頼みますか。

こうした指導技術を身につけると、指導者として大きく進歩します。しかし本当に成功するためには、今自分は何なたの仕事をしているのかということに常に心にとめておかなければなりません。目的は、ただ事を成し遂げればよいというわけではありません。あなたは主と主の子供たちのために奉仕しているのであり、立派に奉仕するためには彼ら愛さなければなりません。

指導者に召されたということをよく考えてください。あなたの得ている大きな機会をしっかりと認識してください。奨学金申請書の教会の責任の欄に、ある若者は「普通の指導的役職」と記入しましたが、そのような気持ちは持たないでください。主のみ名において働くとき、普通の指導的役職などというものは無いのです。

監督会は、手をあなたの頭に置いてあなたを任命しました。これからはあなたが頭を雲の上に伸ばし、高い立場から自分の世界を見る番です。自分の召しを全力を尽くして遂行するとき、主からの靈感をいただくにふさわしい指導者となれるのです。

# 水 と パン に

レアード・ロバーツ

**早** 春の暖かな日のことだったと思います。教会の窓がその年初めて開け放たれ、明るく穏やかな日の光が礼拝堂いっぱいに差し込んでいました。春の風が窓越しに、まだ目に見えぬ花の香りをかすかに運んできていました。私の祖父母と数名のおばやおじたちも両親と共に誇らしげに席に着いていました。私が初めて聖餐のパスをしたときのことです。

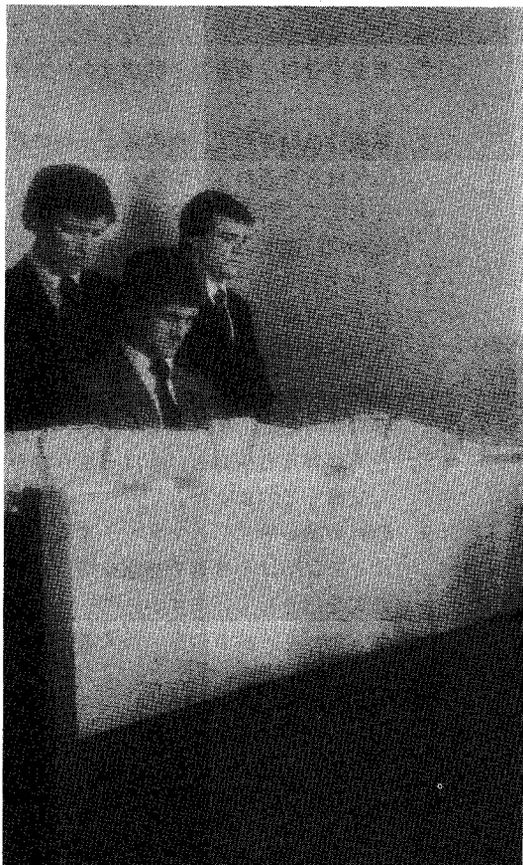
聖餐の歌が終わりました。

監督の合図で私たちはいっせいに立ちあがり、テーブルの所へ歩いて行きました。白い布を取りはずして丁寧にたたむと、祝福の祈りが始まりました。私はそのとき初めて、儀式の大切さと言葉の持つ意味がわかりました。私の親族とそこに集った全員が私に注目しているように感じられて、できるだけ敬虔に落ち着いて行動しようと思いました。聖餐のパスができることに大きな誇りを感じていました。とても名誉なことでした。集会が終わると、ワード部のほとんどの人が私を祝福してくれました。

ところがそれから数カ月が過ぎた頃にな

ると、定員会の友達と同じように、私も神権を持っていることや聖餐のパスをするのが名誉であることを少しずつ忘れかけていました。この儀式が何を象徴しているかも思い起こさなくなり、かえって重荷や義務に感じるようになりました。だれもがやりたくない仕事だから、自分たちに押しつけているんだぐらいにしか思わなくなっていたのです。

この態度は儀式を執行するときにも影響し始めました。ほんの小さな心のずれでしたが、私たちは聖餐会に遅れたり、ふさわしい服装をしないこともありました。集会の間中おしゃべりしていました。聖餐式のときは静かにしていましたし、話をするにしてもそんなに大きな声ではなかったの



すが、それでもやはりだれもが気づくほどでした。こうしたことはささいなことかもしれないませんが、私たちの責任である儀式的の神聖さを損なうものでした。

監督がアドバイザーに、私たちとこの件について話すように申し入れてきました。そこでアドバイザーは毎週日曜日の朝、今やっている儀式的の意味と神聖の重要性、聖餐の儀式的の大切さを私たちに説明してくれました。またアロンの息子たちのことやゲツセマネとカルバリについても話してくれました。アドバイザーは老人で、私たちに語ってくれたことが心からの強い証であることがわかりました。私たちは少しでも態度を改めようと思いました。しかし、2、3週間が過ぎた頃には、以前のような私た

ちに戻ってしまっていました。

ある日曜日、神聖会のクラスが終わると、アドバイザーが私たちにこう言いました。

「きょうの聖餐式は君たちが心配しなくてもいいよ。もう準備はできているからね。」

驚きと何が起きたのか知りたい気持ちとが交錯していましたが、同時に、たった一日でも責任から解放されたことを喜ぶ気持ちもありました。いつものように集會に遅れて入って行くと歌が始まっていて、私たちは中列に座りました。アドバイザーと共に執事の席に着いていたのはワード部の大祭司でした。彼らはワード部でも年長で最も尊敬を集めていました。ふたりは監督、ひとりとはステーク部長の経験者でしたし、みな名誉ある職の経験者か、あるいは現職のすばらしい指導者たちばかりでした。歌が終わると彼らは立ち上がり、祈りが始まりました。

その態度と敬虔さから、彼らが今自分たちがしていることに<sup>ほま</sup>誉れと敬いの気持ちを抱いているのが容易にわかりました。彼らにとっては大切な責任だったのです。地味な背広に白いシャツ、それにネクタイという服装でしたが、服装や儀式的の執行の仕方以前の問題でした。礼拝堂の中は水を打ったようでした。聖餐式は深い感動に包まれて神聖な場となりました。いつもと違う何か深遠なものがありました。みたまがあふれ、言葉に表わせない深い思いがありました。

礼拝堂の窓はその日曜日にも開け放たれていました。すでに晩秋の候で、秋の風が窓越しにそよいでいました。窓の形に青空が見え、落ち葉が舞っていました。私はへりくだっていました。聖餐のパスは人がいやがる仕事ではなく、神聖な信頼のもとに授けられた仕事でした。最も誉れある仕事でした。

# えいゆう

スペンサー・W・キンボール大かん長

お話：ビビアン・ポールセン

「スペンサーは、正しいことを行なう人でした」とヘンリー・アイリングは言います。第12代大かん長スペンサー・W・キンボールは、人に親切にしよう、正しいことをしよう、まわりの人々のもはんになろう、といつもど力してきました。

キンボール大かん長が、あるワード部に行ったときのことで。だんの上ですわっていると、一番前の列の男の子が5人、みんな同じかっこうをするのに気がつきました。男の子たちは、足を組み、手を顔に持っていき、また足を元にもどし、うでを組みました。しばらくして、キン

ボール大かん長は、男の子たちがキンボール大かん長のまねをしていたことがわかりました。大かん長はそれを見て、ほうしのもはんになろうといつもど力してきたことを、思い出しました。

キンボール大かん長はとくにリーハイの子そんたちをあいし、リーハイの子そんたちのためにはたらきました。

1947年4月に、キンボール大かん長はこうおっしゃいました。「いつからリーハイの子そんたちをあいするようになったのかわかりません。生まれたときからかもしれませぬ。父はわたしの生まれる前から、イン

ディアンにてん<sup>どう</sup>道<sup>どう</sup>部<sup>ぶ</sup>長<sup>ちやう</sup>でいたのですから。父<sup>ちち</sup>はてん道<sup>どう</sup>部<sup>ぶ</sup>長<sup>ちやう</sup>でした。父<sup>ちち</sup>はよくインディアン<sup>うた</sup>の歌<sup>うた</sup>を歌<sup>うた</sup>ってくれたり、インディアン<sup>とも</sup>からのおみやげ<sup>しよ</sup>をも持<sup>も</sup>ってきてくれたり、インディアン<sup>とも</sup>の友<sup>とも</sup>だちの写<sup>しよ</sup>しん<sup>しん</sup>を見<sup>み</sup>せてくれたりしました。ですからわたしは、赤<sup>あか</sup>んぼう<sup>ぼう</sup>のころからインディアン<sup>とも</sup>たちをあいするようになっていたのです。それに、しゆく<sup>ふく</sup>福<sup>ふく</sup>しのしゆく<sup>ふく</sup>福<sup>ふく</sup>のせい<sup>せい</sup>いかもしれません。わたしは9さいのときに、しゆく<sup>ふく</sup>福<sup>ふく</sup>しのしゆく<sup>ふく</sup>福<sup>ふく</sup>を<sup>う</sup>受けました。その中<sup>なか</sup>にこう書<sup>か</sup>いてあります。

『あなたは、大<sup>おお</sup>ぜい<sup>ひとびと</sup>の人<sup>ひと</sup>々に、とくにレーマン<sup>じん</sup>人<sup>じん</sup>に福<sup>ふく</sup>いん<sup>いん</sup>をのべつたえるでしょう。』

1945年<sup>ねん</sup>、そのとき教会<sup>きやうかい</sup>の大<sup>だい</sup>かん<sup>かん</sup>長<sup>ちやう</sup>だったジョージ・アルバート・スミス<sup>スミス</sup>はキンボール<sup>キンボール</sup>長<sup>ちやう</sup>ろう<sup>ろう</sup>を事<sup>じ</sup>む所<sup>しょ</sup>によんで、こう言<sup>い</sup>いました。「インディアン<sup>インディアン</sup>たちのところへ行<sup>い</sup>ってほしいのです。インディアン<sup>インディアン</sup>は社<sup>しや</sup>会<sup>かい</sup>からとりのこされています。世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>中<sup>ちゆう</sup>のインディアン<sup>インディアン</sup>をたん<sup>とう</sup>当<sup>とう</sup>して、インディアン<sup>インディアン</sup>の世<sup>せ</sup>話<sup>わ</sup>をし<sup>し</sup>てくれませんか。」

キンボール<sup>キンボール</sup>長<sup>ちやう</sup>ろう<sup>ろう</sup>は何<sup>なん</sup>千<sup>せん</sup>キロ<sup>キロ</sup>も旅<sup>たび</sup>をして、インディアン<sup>インディアン</sup>のところへ行<sup>い</sup>



き、インディアンを教え、しゆく福  
しました。そして、インディアンの  
人々がもっと学校をたてたいと思っ  
ていることを知り、そのためにど力  
しました。病気のインディアンや、  
かなしんでいるインディアンにはし  
ゆく福をあたえて、かれらが天のお  
父さまにとってどんなに大切かを話  
しました。また、こごえて、おなか  
をすかせているインディアンには、  
そこへ行って助けをあたえました。

1947年、ナバホ・インディアンは、  
とてもこまっていました。食べ物も  
着る物も、ほとんどありませんでし  
た。キンボール長ろうは、教会のい  
員会にそのことを話して、トラック  
に何台もの食物や着物を送ってもら  
いました。それから、新聞社にもれ  
んらくしました。すぐに新聞記者と  
カメラマンがやって来ました。新聞  
にその記事がのると、インディアン  
を助けるためのキャラバンがやって  
来ました。キンボール長ろうは、こ  
のことに、ワシントンに手紙  
を書きました。また、あちこちのほ  
うしクラブにも手紙を書き、あちこ  
ちに助けをもとめるパンフレットを  
送りました。

助けられたインディアンは、とて  
もかんしゃしました。あるインディ  
アンは、こう言いました。「ありが  
とうございます。これでこごえずに  
すみます。」

キンボール長ろうはあいするイン  
ディアンたちを助けるために、世界  
中を旅行しました。何週間も何カ月  
もかけて、中おうアメリカや南アメ  
リカ、そして太平洋の島々に住むリ  
ーハイの子そんたちのところへも行  
きました。そして、すくい主イエス  
・キリストについて教え、問題があ  
るときには助けました。どんなにつ  
かれていても、つかれすぎていて、  
人を助けることができないことは、  
けっしてありませんでした。

イエスは、こう言われました。

「たがいにあいし合うならば、それ  
によって、あなたがたがわたしの弟  
子であることを、すべての者がみと  
めるであろう。」(ヨハネ13:35)

スペンサー・W・キンボール大か  
ん長は、行ないによって、みんなに  
あいをしめしてきました。キンボー  
ル大かん長にしたがうということは、  
「正しいことをする」ことなのです。



# アクーマ

お話：リン・ゲスナー

「い つ、タノ口おじいにキバへつれて行ってもらうんだい。おいらは4カ月おそく生まれたのに、きょうつれて行ってもらったよ」とリトル・ブラウン・ベアは言った。

アクーマはウサギの皮の毛ふをかたにまきつけ、火のそばにうずくまった。けおりがうずをまいてのぼって行き、ほらあなのすすけた天井をいっそう黒くした。

「知らないよ、おいら、することはみんなしたんだけどなあ。」アクーマは、しずんだ声で答えた。

「キバに行く前には、もう大人だつてことをしょう明しなくちゃいけないんだぜ。かりには行ったかい。」

「もちろんさ、雪の中をそつとシカに近づいて、山のはしにおいつめてさ、おいらがしとめたんだよ。」

リトル・ブラウン・ベアは頭をふつた。「わかんないなあ、タノ口が

意地悪で、お前をいじめているわけじゃあないし。」

アクーマは、かたをすくめたが、何も答えなかった。しなければならぬことは全部やった。言いつたえも知っていたし、やじりもよくとがらせておいたし、ユツカからせんいをとつて重いサンダルをあむことも、やをいることもできた。大きなほらあなの村からやって来た、いとこのリトル・ブラウン・ベアも同じことをしていた。それなのに、かれだけきょうキバに行った。インディアンの男の子はみな、それをととも名よに懸っている。でも、アクーマは行くことができなかった。父ちゃんは「よくじゅんびした」と言ってくれた。でも、タノ口はつれて行ってくれない。プエブロ・インディアンの父親は、子どもをキバへはつれて行かない。生まれたときから、おじさ

# とキバ

キバ：プエブロ・インディアンの礼はい場。  
ふつうは円形で、一部地下になっている。

んが先生になって、キバへつれて行くことになっているのだ。インディアンの男の子は、キバで一人前の男になるぎ式を受ける。

アクーマはちよつとリトル・ブラウン・ベアの方を見て、キバでどんなことをしたのがききたそうな顔をした。でも、もちろん、それはひみつだった。

リトル・ブラウン・ベアが帰ってしまうと、アクーマははねおきて、茶色の犬をよび、ウサギの皮の毛ふを投げすてた。冬の白だって、走れば体があたたかくなる。

「おいら、ポペタのバカみたいに、ないたりなんかしない！」アクーマはこうさけぶと、ウサギをおいかけ、走り出した。アクーマはぼうを投げてウサギを1びきころし、タノ口おじいに自分のうでを見せてやろうと思った。犬はアクーマについて

谷に下って行った。

アクーマは、びっくりして立ち止まった。ポペタがかめに氷をいっぱい入れ、急な坂道を登って、ほらあなへ帰るところだったのだ。ポペタは小がらだったが、アクーマと同い年だった。ポペタの父ちゃんは足が悪いので、トウモロコシ畑をよくたがやせない。だから、ポペタの家族には、あまり食べ物がないのだ。それに、はやく走ることができないから、ウサギをころして毛皮をとることもできない。ポペタがかたにかけているウサギの皮は、ひどくすり切れていた。

「毛ふも着ていないの、こんなに寒いのに。」ポペタはびっくりして言った。

アクーマはかたをそびやかして言った。「おいら男だもん、寒くなんかないさ。走って行って、夕ごはん

のウサギをつかまえるんだい。」ア  
クーマは、走り出した。

ポペタが重いかめを持ち上げると、  
毛皮がかたから落ちた。あつと言う  
間もなく、茶色の犬がそれをくわえ  
て、いばらのやぶの中へひきずって  
行ってしまった。「こら、帰ってこ  
い、わたしにはそれしかないのよ。」  
ポペタは、いかりをアクーマにぶつ  
つけた。「あんたのひどい犬が、わ

たしの毛皮をぬすんだのよ。とつて  
きて！」

ポペタは、曇りで身をふるわせ、  
かめを持って坂道を登りながらなき  
出してしまった。アクーマは犬を見  
つけようとしたが、犬は毛皮をくわ  
えたまま谷を下って行ってしまった。  
見ると、毛皮の切れはしがやぶにひ  
つかかっている。

「ありやあ、もうだめだよ。」ア  
クーマはそう言って走っていった。  
体は、一ぽかぽかあたたかかった。少



して、アクーマはまがったぼうをウサギに投げつけてころし、とく意気にそれを家に持って帰った。

「もうシチューに入れる肉はあるよ。」<sup>あ</sup>田ちゃんは、火にかけたやき物のなべをかきまわしながら言った。「お前はかりがうまいよ。<sup>あ</sup>田ちゃんも、それはじまんだけどさ。どうしてない人にあげないんだい。」

アクーマはポペタのところへ行つて言った。「この肉あげるよ。」

ポペタは、お礼を言ってからこうたずねた。「わたしの毛皮、見つけてくれた？あれがないと、わたし今夜かけてねる物がないの。」

アクーマは頭をふった。「見つけ

られなかったよ。」

その夜シチューをたくさん食べ、あたたかい毛ふをかたにかけて、火のそばにすわっているうちに、アクーマはポペタのことなどわすれてしまった。

その夜、アクーマは寒くなって目がさめ、毛ふをひっぱり上げた。どこからか、なき声が聞こえてきた。「あれは、バカなポペタだな。あいつは、いつもなくんだ」とアクーマは思った。

灰の白、ポペタのすがたが見えなかった。

ポペタの<sup>あ</sup>田ちゃんが言った。「真合がよくないんだよ。食べ物とあつ



たかい毛皮があるといいたが、うちには何にもないからねえ。」

『かわいそうに』とアクーマは思ったが、あまり気にもとめずに走って行ってしまった。しかし、それからときどきポペタがいないのを思い出した。

「おいらの犬のせいだ。」アクーマはつぶやいた。そう考えれば考えるほど、友だちと遊んでいても楽しくなくなった。

その夜はねむれなかった。とうとうアクーマはおきあがって、ポペタがねている、ほらあなの後ろの方の部屋に行った。

「ほら、おいらの毛ふ、使いなよ。」

「でも、くれるわけにはいかないでしょ。」ポペタは、おどろいて言った。

「かしてやるよ。」アクーマは急いで自分の場所へ帰った。アクーマはがたがたふるえていた。何て寒いのだろう。鳥のはねの毛ふはすり切れていて、体を全部つつむことができないのだ。でも、すみっこにちぢまっていれば、その毛ふでも何とか寒さがしのげた。

ポペタの言ったことは正しかった。



家の物はみんな田ちゃんの物だから毛ふをポペタにやってしまうわけにはいかない。毛ふにする皮をなめしたのはアクーマでも、それは田ちゃんの物なのだ。『ポペタのを作ってやろう。』アクーマはきめた。

それから何日ものあいだ、友だちが遊ぼうとよびに来ても、行かなかった。ウサギがりに行かなければならなかったからだ。ウサギの皮の毛ふを作るのに、荷びき分の毛皮がいるのか、アクーマは知らなかった。ウサギの肉は田ちゃんかポペタにやり、夜は長いことかかって皮をなめした。アクーマはつかれて、ため息をついた。手間はかかるし、おもしろくなかった。ときどきやめたくな

った。でも、寒い夜にポペタがなくのを思い出すと、やっぱりやらなくては、と慰うのだった。

それに寒くてあまりねむれなかったので、じぶんの毛ふを早く返してほしいと思った。とうとう十分な数の毛皮が集まった。でもまだ、するどいやじりをたくさん作らなければならなかった。それから、アクーマは急いでいとこの村の毛ふ作りのところへ行った。

アクーマは言った。「毛ふを作ってくれたら、このやじりをあげるよ。いそいでほしいんだ。だんだん寒くなってきているし、もう雪もふっているからね。」

やがて毛ふができ、アクーマはポペタのところへ持って行った。「お前の毛ふだ、あつたかいよ。」

ポペタは、アクーマの毛ふを返した。「ありがとう、すてきな毛ふね。あんたが肉をたくさんくれたから、病気もよくなったわ。田ちゃんや父ちゃんも、もうおなかを空かせていないわ。」

「これから、肉をとってきてやるよ。」アクーマはもじもじしながらそう言って、自分の家族の火のと

ころへ行った。

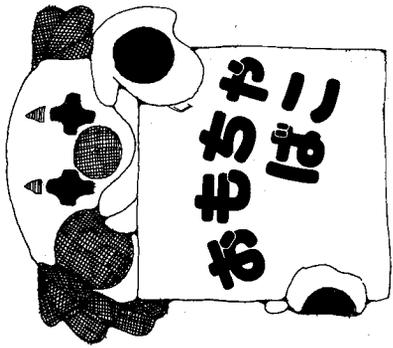
その夜、タノ口おじいがアクーマのところへやって来た。

「朝白がのぼったら、いっしょにおいで。もうキバに行つて、一人前の男になるために、いろいろなことを学ぶことができるぞ。」

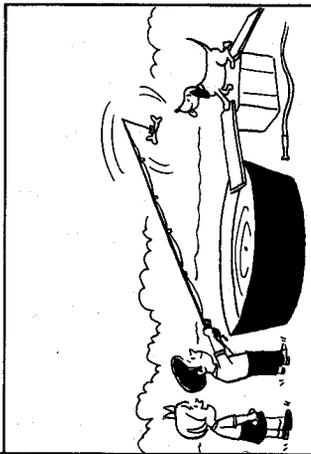
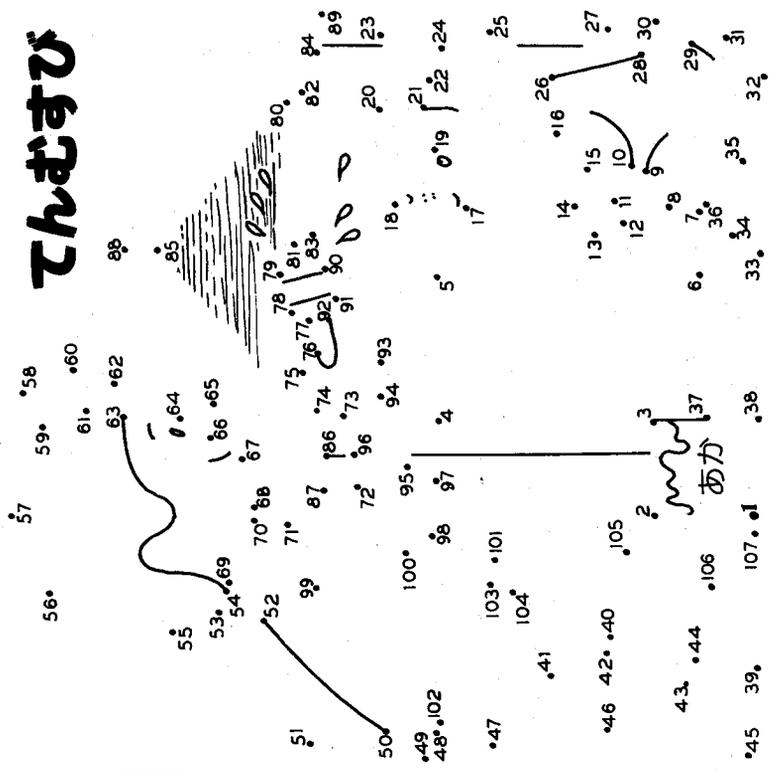
アクーマは、うれしくておねがいっぱいになった。「おいら、うれしいなあ、おじい。でも、どうして今まで行かれなかったんだい。おいら何カ月も、やじりの作り方や、ユツカのせんいのとり方や、かりを習ったのに。」

「しかし、ひとつ足りなかったんだ。それができたから、行けるんじやよ。」タノ口おじいは答えた。

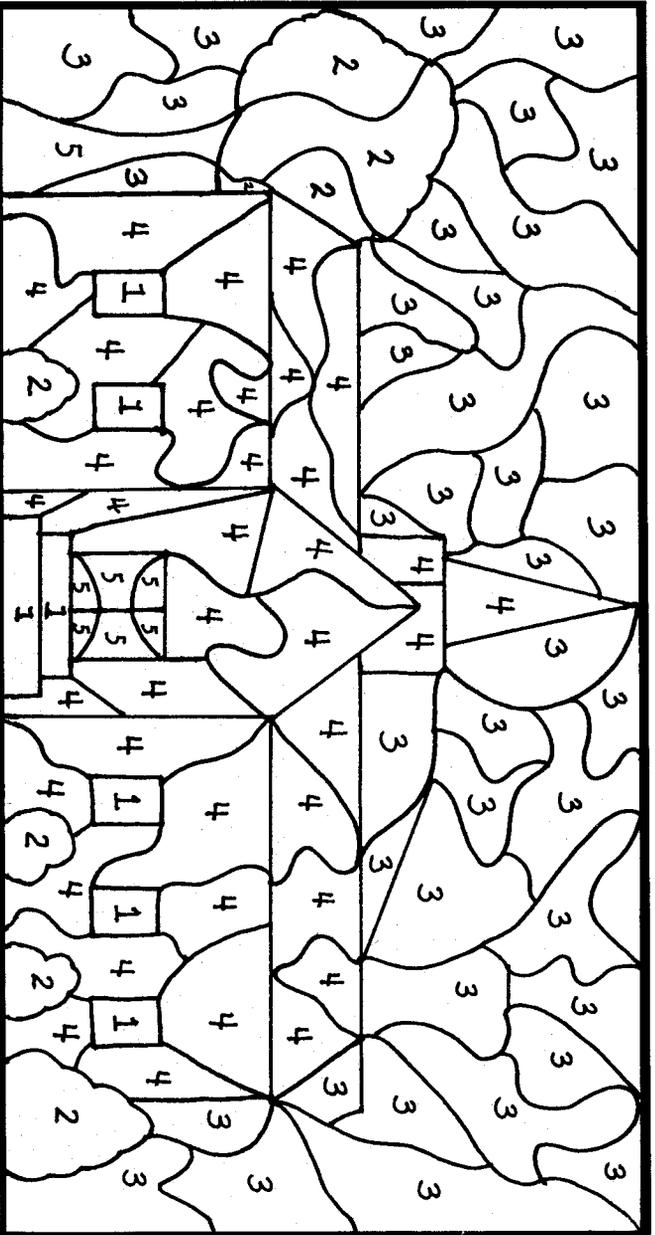
「子どもは他人のことを考えずに遊ぶが、一人前の男は、しなけりやならんことがあるときには、遊ばないでするもんだ。お前の犬が人にめいわくをかけたら、つぐなわにやならん。お前は文句を言わずにそれをした。わしはずっとそれを見ていて、ほこらしかったよ。体はまだ子どもだが、お前は一人前の男の心を持った子だつて言われるようになるだろうよ。」



# てんむすび



ほら、こつち こつち!

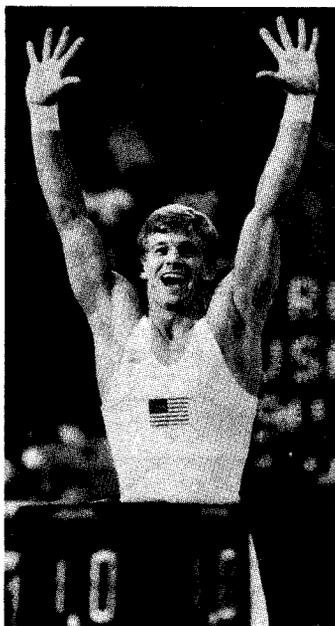


# とくぱうないえ

つぎのようにいろをぬってみましょう。  
 なにがでてくるかな？  
 1ーきいろ, 2ーみどり, 3ーあか  
 4ーあか, 5ーちやいろ

「私は主に感謝しなくてはなりません」

3つの  
メダルを  
獲得した  
ピーター・  
ビドマー  
選手



●あん馬で10点満点を記録し、喜びを表わすピーター・ビドマー選手(写真・UPI)

← 通用する選手にするために日曜日にも休まず練習するように告げた。イングルウッド・カリフォルニアステークス部ウェストチェスター第2ワード部のアロン神権者であったビドマー兄弟は、安息日の戒めを守るか、コーチの言う通り日曜日にもクラブで練習するかを監督である父に相談に行こうとは考えもしなかった。どうするか決まっていたからである。その結果は「退部」であった。宗教的な理由のため

**第** 23回ロサンゼルス・オリンピック大会の男子体操で、末日聖徒であるピーター・ビドマー選手(23歳)が団体総合とあん馬で2個の金メダルを獲得し、個人総合では優勝者の具志堅幸司選手とわずか0.025の差で銀メダルを得た。

カリフォルニア州カルバー市生まれのビドマー兄弟が体操の選手を目指したのは、11歳の頃であった。ロサンゼルス郊外にあったカルバー市立体操クラブに通い始め、そこで今回のロサンゼルス・オリンピックまでコーチを務めることになる日系3世のマコト・サカモト氏との出会いがあった。安息日を除く毎日3-4時間、土曜日には10時間の練習をこなした。

サカモト氏はビドマー少年の練習熱心な姿と可能性を秘めた素質に強い印象を受け、世界に

に日曜日には練習しないことを伝えたビドマー兄弟に対して、コーチの指示に不従順であるとの結論が出されたのである。

ビドマー兄弟はやむを得ず別の練習場を見なければならなくなり、近くの高校でコーチのないひとりだけの練習を始めた。それはオリンピック出場を生涯の夢とする15歳のビドマー兄弟にとっては試練の時となった。

しかしながら、そうした状態も間もなく終わりを告げた。1カ月ほどしてサカモト氏が彼の家を訪ね、自分の信念を通そうとする彼の強い信仰に敬意を払い、体操クラブへの復帰を認めたのである。

やがて進学先を選ぶ段になり、サカモト氏が同じようにコーチを務めているカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)を選んだ。4年

間の大学在学中に、サカモト氏の指導で4度の全米チャンピオンに輝き、そのままオリンピック出場となった。

サカモト氏はビドマー兄弟に、優勝に導く技術を教えたが、一方ではビドマー兄弟から日曜日に練習をしなくても優勝できることを教訓として学んだ。事実サカモト氏は日曜日を家族のために空けるようになったのである。

10年以上もの間、体操を愛しトレーニングを積んできたビドマー兄弟は、その間常に福音を生活に生かす道を見いだしてきた。旅行のときにも聖典をカバンに入れて毎日の勉強を欠かすことはなく、チームのだれもが彼の末日聖徒としての信仰を知っていた。

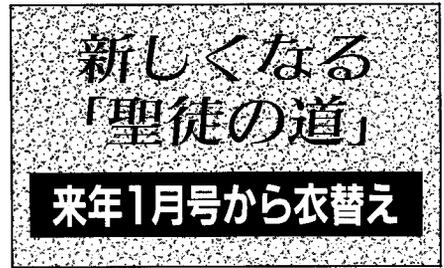
大学で女子体操チームのひとりであるドナ・ハリスとデートをしたときには、彼女に福音を紹介し、みずから手で彼女にバプテスマを施した。それから一年半後の1983年7月、ふたりは結婚したのである。

ロサンゼルスステークス部UCLA学生ワード部に属する彼は、ステークス部で伝道の責任を受けていた。「ファイヤサイドでお話の責任を受け、ひと月に3回ものスピーチを行ないました。彼はお話の依頼を可能な限りすべて受けるように努め、それを彼の信念にしていました。彼はいつも意気盛んで、決して気どるところがないのです」とUCLA学生ワード部のスティープン・H・シャハ第一副監督は語っている。

体操の男子団体総合で米国が世界チャンピオンの中国の猛追を振り切り、五輪初優勝を果たした後の記者会見で、彼は「私は主に感謝しなくてはなりません。すべてこれらのものを与えてくださったからです」と語り、自分が何者で、彼の才能をどこから得ているか忘れることがなかった。またどのようにチームの優勝を祝う予定ですかと聞かれ、「私はモルモンですから、多

分チームのほかの方々とは少しばかり違っていると思います」とほほえみながら答えた。

(「チャーチニュース」8月12日付)



これまでポケットサイズで親しまれてきた「聖徒の道」が、来年1月号から衣替えをし、「エンサイン」と同じサイズ(265×210ミリ)になる。また全部ではないが、本文にも4色のカラー印刷が用いられることになっている。これは大管長会と十二使徒評議会の決定によるもので、全世界16の言語で出版されている国際機関誌が、すべてこの形をとる。

国際機関誌編集主幹ラリー・ヒラー兄弟は次のように語っている。「1978年に大きなサイズからポケットサイズに変わりましたが、それは当時の必要からなされたものであり、今回の決定も、世界的な状況を考慮したうえで行なわれました。カラー印刷を含んだ新しいサイズの機関誌は、教会員はもちろんのこと、教会員でない方々にも広く読んでいただけるのではないかと思います。教会員同士を結び絆として、また伝道の一助としてお役立ていただけるのではないのでしょうか。」

今回の変更のもうひとつのポイントは、発行月が大会号の1月、7月号に加えて、2、4、6、8、10、12月号の偶数月になることである。これは、版の変更に伴う制作費の増加を抑えるためと、年間を通じての情報量を旧版のと



●英語版の教会機関誌。左より「フレンド」（子供向け）、「ニュー・エラ」（青少年向け）、「エンサイン」（大人向け）



きとほぼ同じ（実際は多少多くなる）にするためであり、予約購読料は据え置かれる。購読料は以下の通りである。

- 年間予約 2,200円（送料共）
- 半年予約 1,100円（送料共）
- 普通号250円，大会号（1，7月号）350円

（「聖徒の道」編集室では、これを機会にローカルページの一層の拡充を目指しています。証や各地の話題、「聖徒の道」を読まれての感想文など、日本全国の教会員や求道者の方々にご紹介したいものがあれば、ぜひお知らせください。お待ちしております）

## 聖餐会に219人出席

初めて認められた末日聖徒の宗教行事——ボーイスカウト愛知連盟大会（キャンポリー）

- 「奉仕」を説くイーグル・スカウトのフェロー長老（岐阜県日和田高原で）

去

る8月12日（日）に、名古屋伝道部のジョー・N・池田伝道部長と3人のアメリカ人宣教師と共に、ボーイスカウト愛知連盟の第11回野営大会（キャンポリー）を訪問しました。ボーイスカウト名古屋第89団とステーキ部長会の依頼を受けて、この日の午前中に開かれた宗教行事に参加したのです。

岐阜県北端の日和田高原で開かれたこの大会は、愛知連盟の35周年記念大会で、3,500人もの参加者を数える大規模なものでした。



池田伝道部長、フェロー長老、ペット長老、バルカー長老たちは、少年たちに取り囲まれて故郷でのスカウト活動を思い出し、とても楽しそうでした。特に3人の長老たちはアメリカのボーイスカウト最高位の「イーグル・スカウト」なので、少年たちと話がよく合いました。

名古屋89団のスカウト13人は、昼間の暑さにも夜の冷え込みにも負けずに、はつらつと動き回っていました。広い自然の中で、テントを張

り、かまどや食器置き場、洗い場を設け、テーブルと椅子、さらに門やサクまで作って生活するのです。彼らのほとんどは教会員ですので、安息日の集会で会ってはいるのですが、キャンプ場での制服姿は、一段とりりしく見えました。

キャンポリーでは、日曜日の朝、各宗教団体がそれぞれ宗教行事を行ないます。今回初めて、当教会の聖餐会が公式に認められました。仏教、本門仏立宗、神道、キリスト教、金光教、世界救世教、そして末日聖徒イエス・キリスト教会の7つの宗派が宗教行事を開き、当教会の聖餐会には、219人の参加がありました。

聖餐の儀式は、慣れない場所と人数でやや時間がかかりましたが、少年たちは神妙な面持ちでパンと水を取っていました。

儀式の後で、フェロー長老が話し始めると、暑い中、少年たちは熱心に耳を傾けていました。17歳で半身不随になる事故に遭いながら、2年

後に伝道に出た彼の友人のスカウト魂についての話は、少年たちの心に感銘を与えました。池田伝道部長も、ボーイスカウトの指導者としての経験（ソルトレーク在住の頃はボーイスカウトの「団委員長」であった）をもとに、「いつもほかの人を助ける」（ボーイスカウトの3つの誓いのひとつ）ことについて話されました。

聖餐会が終わった後、伝道部長と長老たちは少年たちに囲まれ、サイン責めに合ってなかなか解放してもらえませんでした。

200人余りの少年たちの心に蒔かれた福音の種が、たわわに実を結ぶことを祈りつつ、私たちは野営地を去りました。

アメリカでは該当年齢の教会員の80パーセントが加盟しているというこのスカウト活動が、日本各地で始まり、発展していったら、すばらしいことが起きるにちがいありません。（レポーター：名古屋伝道部専任宣教師・山本克幸長老）

## 感動を呼んだミュージカル 「家族って何だろう」

——長崎地方部諫早支部

**長** 崎地方部諫早支部では、この8月24日に諫早市文化会館で「家族とは何か」を問いかけるミュージカル・コンサートを開きました。

総出演者30数名のこのコンサートは2部から成り、第1部は独唱と子供たちによるコーラスで始まりました。会場の聴衆を含めて100名を越す人々の大合唱「翼をください」の歌声は、会場を温かいもので満たしました。

そして第2部はいよいよミュージカル「家族って何だろう」の開幕です。独身成人、青少年、



●ミュージカル「家族って何だろう」のフィナーレで「翼をください」を大合唱

求道者の人たちの熱演は、これが全員未経験者の演技かと思えるほどのものでした。クライマックスの場面では、会場のあちこちで涙をぬぐう人たちの姿が見えました。そして最後は再び「翼をください」の大合唱が文化会館のホールを圧して、出演者も聴衆も、皆感激を胸に抱いて家

●「わたしは神の子」「しあわせな家族」の2曲を発表した第1部の子供たちのコーラス



路についたのです。

私たちの諫早支部は、全会員数が50名をわずかに越える小さな支部です。宣教師の千坂秀樹長老からコンサートの計画を相談されたとき、一瞬ためらいました。安息日の集会は20人にも満たないのに、会場は500人を収容する大ホールです。予算のこともあります。しかも準備期間は2カ月もないのです。地方部のコース・カンファレンスの計画で頭が一杯のときでもあり、教えきれないほどの困難がありました。

しかし、会員たち全員一致の「やりたい」という気持ちを聞いたとき、「やりましょう」の言葉が自然に出てきました。それから50日足らずでこれまでやれるとは思ってもありませんでした。

週3回の練習には、遠く島原から、また長崎、大村、多良見、湯江、高来という周辺の地域から集まり、台風10号が吹き荒れた日にも、何人かの兄弟姉妹たちは教会に来て練習しました。

千坂長老の独唱の伴奏をしてくださった求道者の方は毎日のように練習してくださり、その間教会や讃美歌の紹介をすることができ、すばらしい伝道の機会ともなりました。

出演したプライマリーの子供たち13人のうち、会員の子供はわずか2名です。プライマリーの会長さんは、会員ではない子供たちの家を一軒一軒まわって出演の了解を求めました。

諫早支部の会員、求道者、英会話の生徒の方がすべて一致して24日の本番を目標に努力

してきました。この準備期間中、そして当日、私たちは奇跡とも言える祝福を得たのです。結果的にすべてが問題なく進んでいきました。

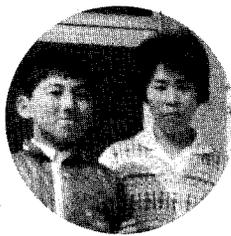
このコンサートを通して私たち出演者や見に来てくださった方々、また陰で働いてくださった方々が何か大切なものを得ることができたように思います。会員一人一人がこのプログラムから強い証を得、今諫早支部は活気にあふれています。

私たちが一致し、主のみ業のために何かを為そうとするとき、神様は必ず道を開いてくださることを感謝を込めて証します。(レポーター：長崎地方部諫早支部長・岡田豊章)

## 暗い毎日からの救い

—私を変えた驚嘆すべき

神のみ業—



神戸伝道部

豊岡支部

寺下 一八

私

は末日聖徒イエス・キリスト教会を知る前1年半ほど仏教を信仰していました。その頃の私は、病気と精神的な苦痛のため、何

ひとつ生きがいがなかったのです。暗い毎日が10年も続いていました。人を信じられなくなり、とても寂しくてたまりませんでした。

体は快復しても、心が少しも満たされなくなっていったのです。当時の私を疲れ果てさせたのは、長年の間に積もり積もった憎しみ、苦しみでした。「生きているのがたまらない」と何度心の中で叫ぶのです。

職場では、喧嘩けんかを毎日しました。一日に6回の立腹も常でした。帰宅後は疲れ切って立っていることさえできない状態だったのです。今考えるととても信じられないのですが、何度となく死にたい気持ちが脳裏をかすめました。

そんなある日のことです。当時小学生だった息子が、声を弾ませてこう私に語りかけてきました。「お母さん！きょう街でふたりの外人さんとお友達になったんだよ」と。話を聞くと、キリスト教会の宣教師だとわかりました。

それから1カ月ぐらい経過しました。私はやっと決心し、息子に話しました。「お母さんもキリスト様のお話が聞きたいので、どうぞ来て下さいって……」

その日の夜、早速おふたりが訪問していただきました。いろいろと話すうち、不思議にも心が落ちついてくるのを感じました。アメリカ人の方が親しみのある瞳を見せながら、「寺下さんにとって人生の目的は何ですか」と質問されました。当時の私には、子供を育てることしか考えられませんでした。はっきりとした人生の目的などなかったのです。

翌日からレッスンが始まりました。なぜでしょうか。私はレッスンの間、ずっと泣いていたのです。どうしても涙があふれて止めることができませんでした。宣教師のおふたりは、一

生懸命心を込めて教えてくださいました。

バプテスマを受ける2日前、初めてひとりきりで祈ってみました。よい気持ちになりました。その夜のことです。私はこんな夢を見ました。ある方が私の名前を3度呼びました。それから、「バプテスマを受けなさい」と3度繰り返すのです。私は顔を上げて前方を見渡しました。私の目に写ったのは、白衣をまとった10人の方方でした。中央のお方が私の所まで来ました。光った手が見えました。そのお方は私の頭に手を置き、ほかの方々も同様になさいました。それは言い尽くしがたい光景でした。

1980年5月25日、バプテスマの日が来ました。私と息子が受けました。すばらしい儀式でした。あくる日のことです。鏡を見て驚きました。私の顔から、憎しみと苦しみの色が取り除かれているのです。驚嘆すべき神のみ業を深く知らされました。

それからの私は少しずつ変わり、あまり立腹しなくなりました。1年がかりで私は性格を変えることができたのです。短気を克服できたのは、真実の神様の教を学ぶことができたからです。「寺下さん、あなたは不思議な人ね。この頃ちっとも腹を立てないのね。」職場でそう言われるたびに、真のキリスト教会のすばらしさを身にしみて感じます。この世の教えからは決して得ることのできない神様からの平安を身に受けることができました。

天父と御子の愛は何と深いことでしょうか。聖霊の導きを感じられるのは、何という喜びでしょうか。主のみ業を推し進められる宣教師の上に祝福がごさいますように。(てらした・かずや 豊岡支部初等協会教師)

# 月刊「ひまわり」の 発刊と編集者前田 勇兄弟の信仰

— 神様が与えてくださった私の仕事 —

札幌西ステークキ部新琴似支部

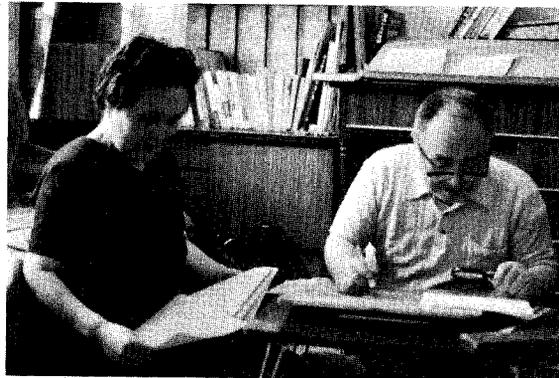
牧野 功

**札** 幌西ステークキ部<sup>ことに</sup>新琴似支部では、会員に対する広報活動の一環として、昭和56年1月から、月刊「ひまわり」(B5判15-25ページ)を発行しています。

この広報誌は、私たちがいつでも日に向かって立つことを願って「ひまわり」と名づけられ、小学生から80歳近い方々までの投稿によって編集されています。表紙にはひまわりの花をあしらひ、内容は福音の教義や証、詩、俳句、随筆、花言葉、その月の会員の誕生日、支部の行事予定、新会員や宣教師の紹介、各補助組織の活動、聖餐会の良い話から不要品の交換広告に至るまで、多岐にわたっています。

「文は人なり」と言われるようにどの文章も豊かな個性を備えていて、それぞれが大変楽しい読み物になっています。それを読むことによって兄弟姉妹の内面をうかがい知ることができますし、それぞれの立場がよく理解できます。このように機関誌という媒体を通してなされる助けたり助けられたり有形無形の援助は、いつも会員たちの信仰生活の支えになっています。

しかし、「ひまわり」が毎月、日に向かって咲くまでには、大変な苦勞がありました。原稿が<sup>ど</sup>滞って誌面が埋まらなかったり、活動委員会(編集会議)が持てなかつたり、編集者のひとりで



●「ひまわり」編集中の前田ご夫妻

ある前田姉妹が病に倒れたり、度重なる苦勞を乗り越えてきました。

この「ひまわり」を担当する6人の広報委員の大黒柱が、高齢で義足のメルケゼテク神権者、前田勇兄弟です。

ある日、印刷していくうちに紙の足りないことに気づいた前田兄弟は、暗くならないうちと思い、みぞれ降る日暮れの町へ義足の足もとに注意しながら紙を買いに行きました。1把の紙も、かさを持っていると足の不自由な彼には大荷物でした。ある辻の横断歩道を渡ったとき、足の遅い彼は赤信号にかかってしまいました。車の警笛に促されて急いで歩道に上がろうとした彼の背に、情容赦なく北風がつき当り、縁石に足をとられた彼はみぞれ雪の中にうつ伏せに倒れてしまいました。車のはねたどる雪が体に降りかかり、体をかばうためにかさも紙も投げ捨てた彼。ひよいと風下を見と幾重もの紙がまくれ転がって、かさとともに遠ざかっていくのが見えました。素早く体を起こして紙を押さえることができぬことを、冷たいみぞれにぬれな

がらひとり嘆いたこともありまして。

また、前田姉妹が入院したとき、ひとり暮らしになった前田兄弟には、いつものように第一安息日に「ひまわり」を仕上げることができませんでした。訳を話して延ばしてもらった発刊の日がつい翌日に迫っていましたが、ひとりきりでは朝までかかっても完成しないことがわかっていました。「妻が元気で手伝ってくれたら終わったのに……。」

夜7時半頃、ピンポンとチャイムが鳴り、戸を開けてみると、そこには連絡なしに来たふたりの若いホームティーチャーが立っていました。3人は夜半までかかって「ひまわり」を仕上げました。翌日、明るい顔で「ひまわり」を配った前田兄弟。神様の助けに心からの感謝をささげました。

このような数々の苦労の末、ようやく「ひまわり」を軌道に乗せることができたのです。第一安息日、礼拝堂に入る兄弟姉妹に「おはようございます」とあいさつしながら3、4人並んで「ひまわり」を配る活動委員の姿が目に入ります。それを見る私たちも「きょうは断食証会である」との念をまた新たにします。

また、何かの理由でこの日集えなかった方や、教会に来ていない兄弟姉妹には、ホームティーチャー、あるいは家庭訪問教師によって届けられています。

ある姉妹は、「入院加療中、『ひまわり』の届けられるのが待ち遠しくて、これを手にしたときは私も支部の皆さんと共に歩んでいるのだ、という強い心の支えを得ました。ですから私もベッドの上で、自分の気持ちを少しでも皆さんに伝えたいと思い、俳句を作り、投稿しました」と証していました。

教会に集っていないある姉妹は、「『ひまわり』を読むたびに教会のことを考えています」と言

われ、彼女の知らない教会員の名前を出して訪問した教会員と語り合うこともありまして。

このように「ひまわり」はたくさんの方の会員の心の輪を広げ、互いの信仰を助け合い、夢と希望を運ぶメッセンジャーとなっています。

「ひまわり」の成長とともに証を強め、信仰の道を歩んできた前田兄弟がこの教会を知るようになったのは、昭和55年の冬、ふたりの外国人の訪問を受けたのがきっかけでした。彼らは日本語を話すばかりか、家に上がる時はコートをたたんで隅の方に置き、靴をそろえ、座ってあいさつする様子は、60有余年の人生経験を持つ彼さえも、目を見はる学ぶべき行ないでした。

外国人という興味で招き入れたふたりの若人の模範に、彼の目は開け、善き業を訪ねて妻と共に会員になる決心をしました。

やがて前田兄弟も、教会の召しを受けるまでに成長し、支部長から与えられた召しは、「前田兄弟、前田姉妹と一緒に広報委員をやっていただけませんか」という言葉でした。

驚いたことに、その責任の内容は、以前に勤めていた「文化協会」や「共済会」で経験していた機関紙の発刊やガリ版技術をひとまとめに



●新琴似支部の広報委員。前列が前田ご夫妻

したものでした。

前田兄弟は、教会で教義を学ぶうちに、福音が真実であることがよく理解できるようになったと語っています。「もしあなたの片手または片足が、罪を犯させるなら、それを切って捨てなさい。両手、両足がそろったままで、永遠の火に投げ込まれるよりは、片手、片足になって命に入る方がよい。」(マタイ18:8)

彼は、自分に両足があったなら教会に来ることがなかったかもしれないし、宣教師に会ってもお話を聞こうとしなかったかもしれないと、これまでの自分を振り返り語っています。

前田家族を訪れると、部屋中に広げられた印刷物の中で働いている老夫婦の姿が目に入ります。夫婦でよく祈り、相談して原稿を選び、誌面に割りつけるのです。原稿が不足しているときは、前田兄弟がいろいろな書物から、教会員にふさわしい格言やことわざ、大成した人の言葉などを所々に配置し、場合によってはみずから原稿を書くこともあります。彼の記す格調高い文学的叙述は、他の追隨を許さないものがあります。



## 「この教会にめぐり会えて幸せです」

一死に対して異常なほどの恐怖心を抱いていた私

仙台伝道部古川支部 遠藤 和枝(高3)

**私**は小さい頃から教会にとっても憧れていました。小学生のときに、よく校門の前に2、3人の人が立っていて、イエス・キリストについての紙芝居を見せてくれたり、パンフレットを配布したりしていたので関心を持つようになりました。

誌面が埋まると、表紙のデザインを考え、ガリを切り、慣れた手つきで印刷します。印刷のあがったものをページを合わせてとじ、表紙をのりづけするのは、前田姉妹の受け持ちです。

こうして夫妻は、毎月120部製本し、第一安息日に教会員に配るのです。

しかし、「ひまわり」ができるまで、前田夫妻が寝ても覚めても考えあぐみ、彼が床をはいながら狭い市営住宅の台所の片すみでせっと印刷していることを知る人は少ないでしょう。

安息日には、肩かけカバンに聖典を入れ、義足を肩で持ち上げるようにして歩み、疲れると電柱につかまって休み、また歩む。寄り添うように歩む姉妹、とつとつとした後ろ姿が目に入ります。

しかし、前田兄弟は「私たちの人生の大半は不遇なものでしたが、今は心から信じ合えるたくさんの方の兄弟姉妹にめぐり会い、福音に生きることを感謝しています。『ひまわり』を発刊することは、神様が与えてくださった私の仕事です。こんな喜ばしいことはありません」とほほえんでいました。(まきの・いさお 新琴似支部長老定員会長)

また、ある映画を見て強い印象を受け、脳裏から離れませんでした。それは、幼い男の子と女の子がお祈りをしている一場面だったので。私と同じくらいの年の子たちでしたから、「私にもできるんだ!」と思って、彼らのつぶやく言葉を必死になって繰り返していたのを覚えています。

ます。

それを見るに見かねた母は、表紙がボロボロになった讃美歌の本を本棚から取り出し、祈りの言葉が書かれているページを開いて私に渡してくれました。非常に感激してしばらくの間、そこに書かれていた言葉でお祈りを続けていました。そして「一度でもいい、教会に行きたい」と思うようになりました。

高校に入学して間もないとき、神様は英会話教室を通じて私を教会に導いてくださいました。1982年の5月のことです。

英会話に通い始めて1カ月ぐらいうると、宣教師の須田長老から日曜学校に来るように勧められ、ときどき行くようになりました。そして10月になって英会話がなくなるのを機に、教会の高校生の姉妹たちの勧めもあってレッスンを受けるようになりました。

私が教会に通い出したのを母が知ると非常に怒りました。母は、今は全然行かないのですが、メソジスト派の教会員であり、いろいろ経験していたようです。「和枝には、私の二の舞を踏ませたくないの。教会に行って挫折するのがわかっているから……」と言うばかりでした。けれども非常にあきつぽく、母に言わせると三日坊主の私がやめるような気配も見せなかったので、「勝手にやりなさい」と許してくれました。

初めのうちは興味本位だけでしたが、レッスンを続けて聞くうちにこの教会が自分の悩みをすべて解決してくれる教会であることがわかってきたのです。

私の悩みとは、第一に死についてでした。私は小学校の6年のときに死について深く考えたことがありました。「自分はどこから来たのだろう。なぜ生きているのだろう。死んだらどこへ行くのだろう」と幼いながら真剣に悩んでいたのです。また死に対して異常なほどの恐怖心を

抱いていました。毎日毎日何か正体のわからないものにおびえながら、いつかこれらの疑問に答えてくれる人に出会うように願い続けていました。それが「人生の目的」のレッスンで教えられたことにより、心の闇が一気に取り去られ、喜びと安らぎに満たされました。

第二に父のことです。やはり小学生の頃でした。父はよくお酒を飲んでいて、夜中に大声で騒いだり、暴れたり茶飯事でした。お酒の恐ろしさをひしひしと感じ、自分が置かれた境涯を嘆いていました。そして「私はお酒を飲む人とは絶対に結婚しない」と心に誓いました。ですから、「知恵の言葉」を聞いたときの喜びは計り知れないもので、コーヒーやお茶をやめることぐらい何ということもなく、その教えをスムーズに生活に取り入れることができました。

私は7月頃に親友の相沢明美さんを教会に誘い、ふたりで一緒にバプテスマを受けようと約束して頑張りました。ところがひとつ解決しなければならぬ問題がありました。バプテスマを受けるための両親の承諾でした。

相沢さんは両親の承諾を得て、バプテスマの日も決まっていました。けれども私は一週間前になっても両親からいい返事をもらえず、非常にあせっていました。そのうえ彼女が祝福されているのを見ていてつらくてつらくて、だれも私の気持ちをわかってくれない……もう教会から離れてしまいたいとも思いました。

しかし4日前になりとてもすばらしい出来事が起こりました。授業中に何度も何度も私を呼ぶ声が聞こえたのです。空耳だと思いつつもその声に耳を傾けると「今、両親の許可を得ることができる」と強く感じました。授業が終わるとすぐに家に電話をかけました。すると今まで決して首を縦にふらなかった父が「うん」と言ったのです。自分の耳を疑いましたが、確かにそ

う言っているのです。家に帰ってから、看護婦の仕事で鶴岡に単身赴任している母に電話をかけて承諾を得て、宣教師の方に連絡を取りました。「お兄ちゃん」と言って頼りにし、8カ月間もの長い間教わった徳田長老から「良かったね」と言われてやっと実感がわき、涙がポロポロと頬を伝わりました。

そして1983年10月9日に仙台の上杉ワード部で相沢さんと共に徳田長老からバプテスマを受けることができました。私の2回目の誕生日として生涯忘れることができません。

今、福音を知ってバプテスマを受けることを望んでいるのに何かの事情があって受けられない方もたくさんいらっしゃると思います。けれども信じて待つならば、神様はその人に最も良い日を選んで導いてくださると思います。私も

1年かかってその日をプレゼントしていただきました。それまでの1年間は貴重な毎日でした。それまでの1年間は貴重な毎日でした。たくさん良い勉強ができました。福音に対する知識、また信仰を養うのに大切な日々だったのです。須田長老から読むように勧められたアルマ書第32章は、信仰が弱くなりかけていたときいつも励ましてくれました。

反対していた母はこの頃とても優しくなり、日曜日に私が教会に行くときにいろいろと助けしてくれます。ほとんどお酒を飲まなくなった無口な父とも、よく話すようになりました。私自身、「以前よりずっと性格が良くなった、変わったよ」と言われます。もしこの教会にめぐり会っていなければ、今のような幸福な日々は送れなかったと思います。(えんどう・かずえ 1967年生まれ、古川支部初等協会教師)

## 人生の充足感を求めて

—宣教師との3度目の出会いから—

横浜ステークス部横浜第2ワード部 光井 康磨



私

は、末日聖徒イエス・キリスト教会との結びつきに、何か宿命的なものを感じています。というのは、現在の横浜第2ワード部に集う以前にも、2回にわたり宣教師との出会

いがあったからです。最初は学生時代、無料英会話を教わるために教会へ何回か行ったことがありました。また社会人となってからも、福岡の地において宣教師の訪問を受けました。そのいずれの場合も私自身に準備ができておらず、福音に興味を示すことがありませんでした。

会社に入って10年余りが経過し、結婚してふたりの子供にも恵まれ、平凡な生活を送っていますが、満たされている半面何か空虚なものを感じるようになりました。現在は仕事に十分満足できても、年をとった後も、そのような充実感を保てるだろうか、また何か自分に欠けてい

るものがあるのではなからうか、という漠然とした不安がありました。

私はその頃、日曜日には長女を家からそう遠くないあるバプテスト教会の日曜学校へ連れて行くのを家庭における責任としていました。そこに集まる子供たちの中にはまだ幼い子供もいて、母親が迎えに行くとその胸の中に泣きながら飛び込んで行く様を見たとき、ある感動を覚えることもしばしばでした。私は思いました。成人した大人に、あの子供たちのように自分を支えてくれる、何か頼りとなる存在があるのだろうか、と。

ちょうどそのようなとき、宣教師の訪問を受けました。それは昨年(1983年)の9月下旬のことです。彼らはよく教えてくださいました。また横浜第2ワード部の何人かの兄弟からも訪問を受け、助けていただきました。そして福音が真実であり、末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の教会であることの証を強めていきました。

しかし問題がひとつありました。知恵の言葉の戒めです。私はお酒が何より好きで、外でも飲みましたし、帰宅してからも晩酌は格別の楽しみでした。改宗するためには、断酒せねばならないとあって、人生の楽しみを失う自分自身に一抹の哀れさを感じていました。

今年1月15日の聖餐会に求道者として出席したとき、なぜか「酒をやめてみようか」との気持ちが起こり、試してみました。結果はスムーズにやめることができました。今は逆に耐えることである種の充実感、爽快感を覚えています。

知恵の言葉の戒めを守り、十分な準備をした後、3月4日の断食日に妻と共にバプテスマを受けました。ここまでよく導いてくださった宣教師(吉原長老、ケイブナー長老、ニューマン長老、キング長老)に感謝しています。また、改宗前に浅間ステーク部長より家庭の夕べに招

かれ、そのすばらしいご家族に触れたとき、末日聖徒の言う永遠の家族を見るようでした。食卓の壁に「思いをまいて行ないを刈り取れ、行ないをまいて習慣を刈り取れ、習慣をまいて人格を刈り取れ、そして人格をまいて永遠の命を刈り取れ」との言葉が色紙に書かれてあるのを見たとき、このようなご家族と同じ信仰を持たらばすばらしいと思いました。

すでに早いもので改宗して半年が経過しようとしています。その間様々なことがありました。自分自身の内に住むサタンの誘惑から、この世的に流されることもありましたが、それでも一つ一つ克服しながら現在に至っています。

7月15日に行なわれた横浜ステーク部の神権会では長老の職に聖任され、家庭や教会における責任の重さを感じています。行く道ははるかに遠い道のりですが、真の改宗を目指して努力していきたいと思います。

このことが子供たちが生きていくうえでの証となりますように。(みつい・やすま 1947年生まれ)

## 「お母さん、夢のよ うに楽しかったね」

横浜第2ワード部 光井 さち

**キ**リスト教会と初めて接したのは、まだ独身のときでした。勤務先の裏にあったカトリック教会の求道者クラスへ、会社の先輩と一緒に興味半分で神父さんのお話を聞きに短い期間でしたが通っていました。しかし強く心ひかれるものがなく、いつのまにか遠のいてしまいました。

やがて結婚をし家庭を持つてからは、ある教会の方が熱心に来られました。その方が置いていかれたパンフレットを読みましたが、こちらは前回よりも感じるものがありませんでした。

そして2年前、長女の幼稚園を選ぶに際し、キリスト教に基づく人間形成という主旨が私たちの家庭の中で欠けているものを補ってくれるのではないかと考え、近くのバプテスト教会の幼稚園に入れることにしました。そこでは親の私にもPTAの催しなどで、少しずつでしたが聖書を見たり、讃美歌を歌ったりする機会がありました。子育てに疲れがちな私に少しなりとも余裕が生まれ、安らぎを覚えるようになりました。また先生方の利己心を忘れた奉仕の姿を拝見し、信仰を持つことは私たちの生活を良くするために必要なものではないかと思うようになりました。

そのように考えるようになっていた頃、夫が末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師からレッスンを受けるようになりました。毎日曜日の夕方熱心に耳を傾けている夫に今まであまり感じたことがなかった尊敬の念を抱きました。しかしレッスンが進んで知恵の言葉の戒めになりますと、夫は悩みました。無理はないと思います。なにしろお酒が大好きで、晩酌を欠かしたことがないほどでしたから、知恵の言葉の戒めを乗り越えるなら真の信仰を持てるようになるだろうと思っていました。

すぐにはこのチャレンジに応えられず、長い間心の葛藤がありました。これからどうなるのか皆目検討がつかずにいたそんなある日、幸いにも浅間ステークス部長が私たちと同じ建物に住んでおられ、私たちを家庭の夕べに招待してくださいました。すばらしいご家族でした。まだ5歳の長女は、「お母さん、夢のように楽しかったね」とそのときの感想を話してくれました。

夫も私も心の中に温かいものを感じて帰宅し、それからほどなくして私たちはバプテスマを受ける決心をしました。

このようにして夫と共に末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となり、天のお父様の子として新しく生まれ変わることができました。これも、これまで何度も私たちにレッスンくださった宣教師の方々や近くに住んでおられるたくさんの方のすばらしい教会員のご家族、教会で温かく私たちを歓迎してくださった兄弟姉妹のお導きのおかげと、深く感謝しています。

家族一同、蒔かれた種が成長して立派な実を結べるように、終わりまで耐え忍んでいきたいと思っています。(みつい・さち 1949年生まれ)

## 職場の仲間全員が 万歳三唱で送って くれました



大阪伝道部  
専任宣教師

高橋 裕子

**私**がこの福音を知ったのは約4年前でした。当時私は看護学生として毎日病院で実習をしていました。様々な環境に育ち、違った性格を持ち、置かれている立場も異なった患者さんたちの前に立つとき、私は不安と恐れと自己嫌悪けんおの気持ちで一杯になりました。なぜなら経験の浅い私は、彼らのために何もできないというのを、彼らも私もよく知っていたからです。

また私は、死がどのような意味を持つのかよ

くわかりませんでした。ですから死について患者さんから尋ねられることを一番恐れていました。不安と自信のない毎日が続けていたとき、私はひとりの友人と話をしました。彼女はほかの友人とはどこか違っていたのです。いつも明るく一生懸命で、とても輝いていました。彼女は末日聖徒でした。

私は彼女や宣教師の助けによってこの福音を知ることができました。人生の目的や救いの計画の話聞いたとき、私の心は喜びで一杯になりました。「私たちはどこから来て、なぜここにいるのか。死んだらどこに行くのか。」この答えこそ私が求めていたものだったのです。私たちの人生は永遠であり、目先だけにとらわれず、長い目で自分を見つめながら、きょうを生きなければならぬことを知りました。またいつも希望を持つことの喜びを知りました。

でも実際病院の中で働いてみると、自分の信仰がいかに弱いものであるかがわかりました。職場での人間関係はむずかしく、同僚を理解することは大変でした。年齢、性格、経験、価値観、それぞれの人が違います。どうしてこの人はこんなことができるのかと、理解に苦しむこともありました。時にはひどい言葉を投げかけられ、相手に悪い感情を持ったことさえありました。

私にとって福音はただの知識にしかならなかったのです。相手のよくない点を見てそれだけでその人を判断してしまい、ほかの良い面を探そうとしませんでした。また自分のことは全然省みなかったのです。

このことに気づき、心から悔い改めたとき、相手を少しずつ理解することができるようになりました。そして自分が本当に職場の一員であると感じることができました。

仕事をしているうちに、たくさんの亡くなる

人の姿を見ました。ほんの30分前まで一緒に話していた人が、今は何も語るができないのです。その姿を見たとき私は、死をこの身で実感しました。そしてこの現世の期間の短さ、時間の大切さを痛感しました。この福音が真実であるという証が、毎日の生活の中で強くなっていきました。

そんなある日、ひとりの患者さんが私にこのように話しかけてきました。「私、死ぬのが怖い。子供たちと別れるなんて考えられないわ。」私はのどもとまで言葉が出てきたのに、声に出すことができませんでした。なぜあるとき彼女に福音を話すことができなかったのでしょうか。いつか彼女に話さなければと思いながら、なかなかその機会を作ることができませんでした。彼女はある朝、状態が急変して私の目の前で亡くなりました。私はとうとう、彼女に福音を伝えることができなかったのです。

この経験を通してひとつのことを思い知らされました。確かに私は福音を知ることができたおかげで幸福です。多くの人からたくさんのことを学びました。でも、ほかの人にどれだけこの喜びを伝えてきたらうか。すべての人にこの福音が必要であることを、どれだけ意識していただけるか。そして自分にとって今何をすることが必要なのか、神様が私に何を望んでおられるのかが、よくわかりました。

私は伝道に出る決心をしました。職場の仲間には驚き、このまま仕事を続けるように言いました。しかし最後はスタッフ全員が万歳三唱で私を送ってくれました。

私のような小さな者でも、召してくださった神様に心から感謝しています。神様の愛に応えられるよう、精一杯働きたいと思います。(たかはし・ゆうこ 仙台ステーキ部上杉ワード部出身)

## 完成した福島ワード部 教会堂——種がまかれて17年

**東** 北新幹線で大宮より1時間半、吾妻連峰が左手に見え始めたら、みちのく東北の表玄関、福島です。

3月に完成した教会堂は、元病院の建物を改築したもので、150名収容の礼拝堂と13の教室、20台収容の駐車場を備えています。近くには、市役所、地方裁判所、市民会館、NHKなどがあり、落ち着いた町並みの中にあつて、天空を指してそびえるシンボルタワーが、一段と印象的です。

礼拝堂に入っただけで温かく包み込まれるようなやすらぎに満たされ、神とイエス・キリストへの感謝の気持ちがわきあがってきます。

福島の聖徒たちにとって、ワード部は安心して集える所、福音を学び、成長する所、さらに「いと高き者に礼拝を捧」（教義と聖約59：10）

げ、「暴風雨の<sup>きどころ</sup>避所」（教義と聖約115：6）となったのです。

福音が伝えられて17年間、忠実に信仰を守ってこられた堀江恵助兄弟、トミ姉妹、大河内英子姉妹を初め多くの宣教師、兄弟姉妹の犠牲と忍耐とに支えられて完成したとはいえ、だれがこのような祝福を間近に見ることができたでしょう。

開発が遅れているとか、改宗者が少ないと言われてきた東北、福島の地ですが、神様は忘れられず、多くの試練の後に、豊かな祝福を与え聖徒たちを喜ばせてくださいました。

このシオンは、私たちの宝であり、神の恵みによってもたらされたものです。これからも聖徒の心をひとつにして、主のみ業の発展のために励みたいと思っています。

まことに主の言葉のように「福島の隅々に至る一切の人々よ。シオンに来て金銭なしに無料で乳と蜂蜜とを買え」と呼ばわりたい気持ちで一杯です。（仙台ステーキ部福島ワード部監督・渡辺正歳）

## お | 知 | ら | せ |

### ■初等協会音楽カセットテープ

〈新発売〉10種 各500円



●ひかり、星コースA、星コースB、CTRコースA、CTRコースB、勇者コースA、勇者コースB、明るい少女コースA、開拓者コースA、開拓者B/明るい少女Bコース11の教師用テキストに載っている全曲がピアノなどの伴奏で収録されている。

●ローカルページに皆様の原稿をお寄せください。来年度1月号掲載分の締切は11月9日（必着）です。投稿には必ず連絡先（電話番号）を記入してください。

●あて先：〒106東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。☎03-440-2351(代)

訂正 10月号ローカルページの64、65ページの「JMTC第62期生」と「第63期生」はそれぞれ「第61期生」と「第62期生」の誤りでした。

仙台ステーキ部福島ワード部 1984年3月16日完成

福島県福島市北五老内町1-32 TEL 0245-31-0489

敷地面積：651.91㎡

建築面積：267.50㎡

延床面積：761.34㎡



渡辺正歳監督



